

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2015」 入賞作品

目次

★優秀賞

宮永幸則	3
露木春那	4
一木有海	5
安倍佑美	6
谷古宇建仁	7
境晶子	8
皆川真祐子	9
讃井知	10
鈴木洋晶	11
丹波恵里佳	12

★入選

山崎顕吾	13
木村麻莉子	14
中西刀麻	15
山本直人	16
村上恵理	17

★佳作

山本勝巳	18
吉崎晴香	19
松坂茉留	20
古川裕樹	21
林桃代	22
鴨下綾花	23
濃野司	24
水野裕大	26
了舟隼人	27
岸本美樹	28

藤崎貴行	29
ターン有加里ジェシカ	30
上山幸穂	31
加藤愛澄	32
光本恵理	33
和泉澤大地	34
福岡杏菜	35
中澤耀介	36
西村歩	37
倉澤正樹	38
菅原悠希	39
日高真太郎	40
楠田法隆	41
中島大地	42
松本祐輝	43
塚原かたり	44
近藤香月	45
山口真弓	46
武富波路	47
庄崎友紀	48

2015年度テーマ：隣人「中国」と私

★優秀賞

「日中農業活性化の架け橋となる」

宮永幸則

隣人・中国のことを身近に感じるきっかけとなったのは、私が高校三年生の頃のことだ。中国人留学生の黄さんが、果樹園芸を営む祖父母の家にホームステイをするためにやってきたのだ。北京市郊外の農村地帯で生まれた黄さんは、高校生の頃から日本語を学び、将来は中国で農業の指導者となるために中国農業大学に進学。その後、日本の有機農業や環境保全型農業を学ぶために神戸大学農学部に留学していた。日本のさまざまな農家を訪問し、寝食をともにして農作業に汗を流しながら見聞を深めていた。とても勉強熱心で、家族想いの、綺麗な日本を話す優しいお兄さんだった。

ちょうど10年前のことだから、中国は急激な成長を遂げて経済大国の仲間入りをしようとしている頃だった。急激な経済発展により、工場の増加に伴う工業排水が増加し、農村地帯でも農薬や化学肥料が積極的に使われるなど農業用水の汚染が深刻化していた。黄さんは、「日本では、地域の環境を守るために農薬を減らす農業が行われている。私は日本の農業技術や栽培方法を学んで、中国でも環境保全型農業を広めたいんだ。私は自分が生まれた中国が大好きだ。だから中国の農業のために働きたい」との熱い思いを持っていた。毎晩のように祖父母とともに農業談義をしていた姿が、いまでもはっきりと目に焼き付いている。

高校三年生で進路選択をする時期であったこともあり、私は黄さんから多大なる影響を受けた。黄さんは、三月末をもって故郷の中国へと帰国することとなった。帰国する際、黄さんと「私たちが日本と中国の農業活性化の架け橋になろう！そして、互いのふるさとのために大いに働こう！」と硬い握手をし、夢を誓い合ったのである。私は高校卒業後、東京農業大学に進学し、農業を通して世界の飢餓問題や環境問題の解決に取り組みたいと考え、親元を離れて東京に出るという選択をした。大都会・東京のど真ん中に居ながら、夏休みなどの長期の休みを利用して世界各地の農業生産現場を見て回った。大学では、開発途上国における農村開発を学びたいという同士たちに囲まれ、大いに研鑽し合うキャンパスライフとなった。台湾・淡水大学でりんごの海外輸出に関する調査を行ったり、中国農業大学の留学生と共に中国の農業に関する勉強会をするなど、農業漬けの日々を過ごしたのだった。

大学卒業後、JA 全農グループの営農指導員として農業指導に従事してきた。栽培技術から販路開拓や経営のアドバイザーまで、さまざまな経験をすることができ、とても充実した毎日であった。しかし、自分自身が農業の担い手として活躍したいとの思いが強くなり、五年間の社会人生活を経て、昨年春に起業し、現在は滋賀県で農業法人を運営している。今年の春からは、農業に従事する傍らで大学院に進学し学びを深めている。

私は自分の家の二階部分を活用し、外国人旅行者や留学生が農業体験できるよう民泊の受け入れを行なっている。亡くなった祖父母が、日本の農業の素晴らしさや自然環境に配慮した農法を伝えていたように、私自身がいまホストとなってゲストのために場所を提供しているのだ。中国や台湾をはじめ、世界各国からの留学生や旅行者が滋賀の過疎地域にある我が家を訪れてくれる。日々の出会いに感謝しながら、爽やかな汗を流している。

私の夢は、「日本と中国、そして世界」の農業活性化の架け橋になることだ。「人間に胃袋がある限り、農業は永遠に不滅である」という言葉があるように、農業を通して世界をつなげる仕事がしたい。黄さんと再会で

きるその日を夢見て、私は農業に汗を流しながら、自分にできることを一歩ずつ進めていきたい。

「文字でつながる中国とわたし」

露木春那

「今日から教育実習をさせていただく中国美術學院書道学科の学生です。どうぞよろしくお願いいたします。」小学校の守衛室でときどきしながら中国語で挨拶をした。昨晚何度も繰り返し声に出して練習した一つの挨拶だ。中国で大学生活を開始してから約二年が経った 2013 年の秋、人生初めての教育実習をまさか異国の地ですることになるとは…。教室へ案内される途中、校庭で全校児童が集まり朝の体操をしているのが見えた。こんな元気いっぱいの子供たちと書道の授業をするなんて、私のような留学生に務まるのだろうかと急に不安になってきた。

小学校の書道教室は広々として、机とイスも古風なデザインで揃えられており、先生の手元を拡大した映像をプロジェクターで映し出す設備もあった。なんて心地よい教室なのだろう。窓辺の白いカーテンがふわっと膨らみ、涼しい風とやさしい光が教室に入ってきた。授業開始のチャイムが鳴ると、さっきまで校庭にいた子どもたちがどっと教室に駆け込んできた。

実習第一日目、早速普段行われている授業を見学させてもらえることになった。先生は筆を持つ前にこんなことを呼びかけた。「さあ、みなさん、窓の外の木を見てください。枝にはたくさん葉っぱが付いていますが、どれも大きさや形が微妙に違います。では次に自分の手を見てみましょう。五本の指はどれも、長さや太さが違います。自然の美しさは少しずつ違うものが集まってできているのです。ですから私たちも美しい字を書くために、大きい小さい、長い短い、太い細いの対比や、余白や運筆の変化を意識しましょう。」小学三年生でも理解できるわかりやすい説明方法に私は深く感銘を受けた。きっと先生のお話は、書道芸術についてだけではなく、学校の友達、もっと広く考えれば社会、そして世界はみんな違って当たり前、みんな違うから面白いのだというメッセージも含んでいるのだろうと思った。

二週間目からは自分ひとりで教壇に立ち授業をすることが決まった。授業のやり方や内容はすべて私に任せると言ってくれた。あれこれ悩んだ末、日本はいかにして中国の文化を学んできたかを説明するために、遣唐使の歴史を紹介し、当時の日本の書道作品を臨書することにした。普段使われている教科書の内容から脱線してはならないと考え、漢字の古典作品、空海の『風信帖』を教材として選んだ。二週間目最後の授業が終わると先生は私にこう声をかけた。「今週の授業はとても素晴らしかったよ。みんな楽しそうでしたね。子どもたちは常に新しいことを学びたいという気持ちでいっぱいです。ですから来週からは私が普段教えることのできないようなことをぜひ授業でやってください。日本のひらがなをみんなで書いてみてはどうでしょう。」まさかこんな素敵な心躍る提案を先生からしてくださるとは思ってもいなかった。この瞬間、先生方が、子どもたちが、学校が、このまちが、私の個性を歓迎し見守ってくれているのだと強く実感した。

いよいよ実習の三週間目がスタートした。授業では童謡『紅葉』の一節「あきゆうひにてるやまもみじ」と宮沢賢治の詩の一節「雨二モマケズ風二モマケズ」をみんなと一緒に筆で書く練習をした。ひらがなとカタカナは日本のみで使用される文字であるが、どちらも中国の漢字にルーツがある。ひらがなは漢字の草書体をもとにして、カタカナは漢字の一部分を借りてつくられた文字であるということをクイズ形式で説明をした。古来、中国の文化と日本の文化は強く結びつき、影響し合ってきたということ子どもたちに知ってほしかった。そう、私たちはこれからもずっとお互いに手を取り合い、より明るい未来へと一緒に歩いていくのだ。授業終

了のチャイムが鳴った。「露木先生！今日書いた作品を家に持ち帰ってもいいですか？記念にとっておきたいのです。」子どもたちの瞳には明るい未来が映っている。もちろん私の瞳にも。

「心をつなぐハガキ」

一木有海

私は今日も楽しみにポストを開ける。まだかな、まだかな。あっ、来てる！差出住所は中国浙江省杭州市。“隣国”中国から届くハガキ。ハガキのやりとりを続けてちょうど1年が経つ。昨年9月、私は日中友好大学生訪中団の一員として中国を初めて訪れた。差出人は、その時に仲良くなった、当時杭州師範大学4年生のミンちゃん。私にとって、友達でもあり、憧れのお姉ちゃんのような存在でもある。

届いたハガキには、大学卒業後、デザイナーになる夢を叶えるために新たな1歩を踏み出したミンちゃんの活き活きとした字が綴られていた。私は1文字1文字を噛みしめるようにゆっくりハガキを読んだ。綴られた漢字にはまるで表情があるように、私に語りかけてくれる。夢に向かって頑張るミンちゃんからのパワーを受け取った。時々、以前に届いたハガキを読み返すこともあり、日々の情景を想像したり、中国を訪れた時のことを思い出したりしている。

昨年の秋、初めてミンちゃんにハガキを出す時には、住所や文面に間違いが無いかなど、とても緊張して書いたことを覚えている。今では、最近どこどこに行ったよ、今度何々する予定だよ、ミンちゃんはどうかなどと、たわいもない近況を語りかけるように自然とペンが走る。ミンちゃんにハガキを書く時間は、私にとって、とても楽しいひと時だ。

つい先日、私の大学で開催された「語りつくせぬ感情—巴金と日本の写真・文献展」を見に行った。そこには、巴金の友人である日本の人々が中国の巴金に送ったハガキが展示されていた。巴金は現代中国を代表する作家であるが、日中間に国交が無い時から、日本を訪れていたそうだ。様々な場面で「日本の人々との間にも共通の話題・共通の感情を感じた」と巴金は「私と日本」の中に記している。

1930年代から、個人間では日中交流があったことを知り、驚いた。戦火による焼失を奇跡的に免れたぼろぼろのハガキと、そこに筆で力強く書かれた文字を見たとき、先人の人々が築いてきた日中交流の計り知れない重みを感じた。残念ながら巴金のハガキは現存していないそうだが、巴金から日本へのハガキは中国語で、日本の人々から巴金へのハガキは日本語でしたためられ、交流が続いていたという。偶然にも、ミンちゃんと私の文通も同じスタイルだ。約70年前から、ハガキを通じた中国と日本の心の交流が現代の私たちに引き継がれているようで、とても感慨深いものを感じ、まさに、「語りつくせぬ感情」が私の胸にも湧き上がった。

中国を思い浮かべたとき、彼女の顔がすぐに浮かぶ。「また会いたい」と思う友人が中国にはいる。ハガキのやり取りが、ミンちゃんと私の心をつないでくれた。

さあ、今月の返事はどんな話を書こう。夏の花火大会が楽しかったこと、中国から日本に観光に来ている女の子に電車の中で突然話しかけられて、日本のお土産の相談に乗ったこと、教員になる夢に向かって試験を受けたこと……ミンちゃんに書きたいことがたくさんある。すぐにでも会って、直接話したい気持ちになる。会いに行けるその日まで、ハガキで語りかけよう。大切な友人がいる、中国。私にとって、心が通い合う“隣人”なのだ。

「通じ合う心」

安倍佑美

一枚の写真、軍隊にいた頃の祖父の写真の後ろに写っていた景色が、どこか黄土高原を思わせる中国の景色だと気づいたのは留学から帰ってしばらく経った後だった。

確か、留学中も何度か戦争の話になり、日本語を学んでいる学生から「私たちにとって歴史は過去のことじゃないんです。」と言われ、その言葉をどう受け止めてよいかわからなかった。お互い銃を向けあったわけではないのに、なぜこんな会話をしなければならないのか、と思うと同時に、彼らの傷の深さを知った。しかし、帰国後、戦時中の祖父の写真を改めて見たとき、私の頭の中で、自分も歴史の一部であり過去の戦争が遠い夢物語ではないということが、はっきりと繋がった。

私は、中国の悠久の歴史や文化に惹かれ、中国文学を学び、2006年に中国の西安に留学した。初めて見る壮大な景色に圧倒されたり、民族の多様性に驚いたり、赤信号で多くの車が止まらないのに、青信号で止まる車もある不思議な交差点をびくびくしながら渡ったり、とにかく毎日いろんなことが起こる中国の生活を楽しんだ。一年が過ぎ、日本に帰らなければならない頃、ひとつ心残りだったのは、本当の意味で心を通わすことができる同世代の中国人の友人を作ることができなかったということだった。

十分に意思疎通をするには語学力が足りなただけでなく、日本語を学んでいる学生と話していても、どこか歴史認識の壁が横たわっているように感じられるときがあった。文化や習慣の違いは少しずつ理解し、歩み寄って行けるが、『過去』をどう扱っていけばいいのだろう。葡萄を買いに市場に連れて行ってくれた老夫婦、町を案内してくれたおじさんたち、汽車の中で話をしてくれた女性、学院の先生方、出会った人たちの温かさを思いながらも、そんな疑問は増していくばかりだった。

見えない『壁』の問題は解決しないまま数年が過ぎたが、昨年、研修員として職場にやってきた熊さんに出会った。彼女の日本語が堪能なことにも助けられ、一緒に仕事をしていくにつれ、いろんなことを話すようになった。結婚のこと、仕事のこと、家族のこと、将来のこと。話を聞くうちに一人っ子である彼女の重圧は相当なものだと感じたりもした。それでも、彼女の意見は建設的で、前向きであり、将来に対しても様々な戦略を持って、それを着実に実行していくように見えた。そんな同世代の生き方を見て刺激になった反面、もう少し自由に自分の幸せを一番に考えてもいいのではないかと思い、彼女にそう言ってみたこともあった。交流を続ける内に、ついに熊さんが我が家に一泊することになった。夕食を食べたり、話をしたり本当に楽しい時間を過ごした。勿論、彼女とは歴史や戦争について話をしたわけではない。ただ、一個人として、『腹を割って話せる』ということを実感できたのは、私にとっては大きな収穫だった。

そんな心が通じる瞬間があったからこそ思う。彼女も歴史を持っている。歴史は過去のもの、今と切り離して考えることが、本当にできるのだろうか。そういうことは脇に置いておいて、交流を深めようとしてもうまくいかないのではないか。中国人の学生が言ったように、過去の歴史が今につながっているならば、ちゃんと認識することで、もっと前に進めるのではないかと。まずは、負の歴史であっても、『日本人の歴史』として受け止めることから始めようと思った。多くを語らなかつた祖父が見たものはなんだったのか、今となっては聞くこともできないが、その景色も今のこの時間に繋がっている。彼女に会ったからこそ、私はもっと多くのことを知りたいと思うようになった。

戦争の歴史を忘れずに、この先を生きていきたいと思う。まだそれが正解なのかかわからないが、日本と中国の双方のために、今自分ができると思う。

『ふつうの日本人から見た「中国」』

谷古宇建仁

私は比較的ふつうの日本人だ。埼玉で生まれ育ち、小中高と公立の学校に通った。今は、都内の大学で政治学を学んでいる。先月までは就職活動をしていた。他の学生と同じようにスーツを着て、選考を受け、内定をもらった。卒業論文を書いて卒業すれば、来春からは社会人だ。日本人として、ふつうの人生を送っている。

したがって私は、中国と特別な関わりがない。第2外国語では中国語を2年間履修して、単位は取れたが、今では少しの日常会話くらいしか話せない。中国に旅行も留学もしていない、ふつうの日本人だ。

しかしそんな私の生活の中にも、中国はある。小学校、中学校、大学には、中国人の友達がいた。キャンパスには留学生の数も多く、そこかしこで中国語を耳にする。街でも働く中国人を見かけるし、アルバイト先にも中国人がいた。観光ツアーで来日し「爆買い」をする中国人も見かける。今まで多くの中国人に出会ったが、特別、中国人を嫌いになったことはない。

日本文化の中にも中国はある。漢字や四字熟語、ことわざ、孔子や孟子の教えなども浸透している。日本は中国から多くの影響を受けてきた。逆に、日本が中国に与えた影響もあるだろう。海で隔てられてはいるが、その境目は曖昧で、切っても切り離せない。この関係は腐れ縁のようなもので、中国と日本があり続ける限り、私たちは永遠の隣人なのだ。

では、近年の隣人関係はどうだろうか。現在、中国と日本の関係が悪いと思っている人は多いだろう。そう思う理由は大抵報道によるものだ。両国政府間の関係、安倍政権の動向、領土、PM2.5や歴史観の問題などは、ネガティブなイメージへと繋がるだろう。

しかし、両国の政府間の関係が悪いということが、すなわち、中国人と日本人の関係が悪いということだろうか。私は決してそう思わない。個々人の関係は決して悪くない。

習近平も日本料理を食べれば、安倍晋三も中華料理を食べる。インターネットやSNSで、強気な発言をする人もきっと、刺身や寿司、麻婆豆腐やシュウマイを食べて笑顔になる。レッドクリフは日本でヒットしたし、日本のアニメや漫画は中国でも人気だ。関係が良くないのは政府間で、多くの人はその報道を見て互いを嫌いになっているだけだ。突き詰めて考えて、意見をぶつけ合えば、嫌い合う理由がたいしたものではないと気がつくはずだ。

私はふつうの日本人だ。敢えて他の人と違うことを挙げれば、ふつうの人より中国に興味があり、大学で「地域研究(日本・東アジア)」を副専攻としたこと、大学3年次に1年間イギリスに留学したこと、政治学を学んだこと、そして来年4月から記者として働くことがある。

中国について興味を持ち、学んでみて思った。食わず嫌いをする人もいるが、知れば中国はおもしろい。逆に中国の人にも、日本について知ってほしい。

イギリスに留学して思った。隣同士だから喧嘩することもあるが、それはイギリスとフランスも一緒だ。日本語で言う「ツンデレ」のようなもので、政治・外交で「ツンツン」しても、文化に対しては「デレデレ」する。心底憎み合っている人は多くない。

政治学を学んで思った。その国の軍事力や経済力は、政治や外交においては意味を持つ。しかしそういった力も、元を辿れば一人一人の国民のものだ。最近、日本では安保法に関して人々が声をあげ、政治が動きかけた。人々が望めば、両国政府の政治・外交もきっと良い方向に動くはずだ。

私は来年の4月から、ある放送局の記者として働き始める。いつか特派員になって中国の良さを日本に届け

たい。また国内からも、日本の良さや、日本にいる中国人の良さを広めたい。

来年から記者になる私は、大きな希望を持っている。両国間の関係が悪いなら、これから良くすればいいのだ。両国の人々が仲良くする姿を人々に届ける、そんな報道をする日が楽しみだ。

「朋友的朋友，就是朋友。」

境晶子

2011年4月天津に赴任した。2011年3月11日の震災後から、数週間後のことでした。天津に赴任する前は、北海道で働いていましたが、生まれも育ちも福島であり、実家で1人生活している母、親戚、友人のことがとても気掛かりでした。しかし、新任であったことと母親の後押しから新天地で頑張ることを決心しました。

天津の職場ではほとんどが日本人でしたが、事務員、警備員さんは現地中国の方でした。赴任して間もない頃、中国でもたくさん日本の震災について報道がありました。私が福島出身と知ると、同僚は心配してくれましたが、ある事務員の方がそれ以上に心配してくれたことに驚きました。「母親は1人で大丈夫なの？」「近くに親戚や身よりはいるの？」「原発の場所からは離れているの？安全なの？」まるで家族のように心配してくれました。またある時は、部屋の大家さんが、同じように心配して声を掛けてくれました。「部屋が空いているし、もしお母さんが来ることができそうなら、ここに住んでもらったら？」この出来事があって、中国の人は相手のことを思いやり、優しいと思うようになりました。

日本では、「大丈夫でしたか？」「心配ですね。」と見舞いを伺いますが、それ以上聞くのは個人的なことを聞くので失礼ではないだろうか？どこまで聞いたら問題ないかなど躊躇して遠回しな質問をすることがあります。これは距離感を保つ日本の文化かもしれません。あるいは昔より人と人との関係が希薄化しているのかもしれません。実際、ご近所つき合いが減ってきています。福島県の田舎で育った私は、時にこのつき合い方が冷たいと思うことがありました。田舎ではご近所つき合いが当たり前で、お隣さんの家に遊びに行ったり、ごはんを作りすぎたらお裾分けに行ったり、そんなことが当たり前でした。

中国に住んでから、またそんなご近所つき合いが始まり、中国の人に対して親近感を持つようになりました。それからは沢山の友達ができました。週末に買い物やカラオケ、食事に行くようになりました。職場の人以外に、中国語の先生や日本語を勉強している学生さんと仲良くなりました。

しかし楽しい時間があっという間で1年が過ぎようとした頃、体調を崩したことがありました。仕事を休むことがあり、それを心配した職場の中国人の事務員さんが休日に漢方医がいる病院まで連れ添ってくれました。事務員さんの知り合いが病院関係の方で、手続きまで済ませてくれたおかげで、スムーズに診察も終わりました。身内でも直接の知り合いでもない私を心配し、気遣ってくれました。その時、「朋友的朋友，就是朋友。

(友達の友達は、友達だよ。）」と言ってくれた言葉は今でも忘れません。その当時、簡単な中国語は話せましたが、この時を機にもっと中国語を勉強して相手を理解したいと思うようになりました。

帰国して私は今、大学院で中国語を勉強しています。将来は中国語を教える仕事をしたいと思っています。私が中国で経験したことで中国の人を好きになったように、同じように中国を好きになってくれる人が1人でも増えたらと思い、自分の経験を伝えていきたいです。

私は、中国の人のように、相手を思いやり、困っていたらすぐに手を差し伸べることができる人になりたい。もし、日本に来て困っている中国の人がいれば、力になりたいし、知り合いが困っていたら、「朋友的朋友，就是朋友。(友達の友達は、友達だよ。）」と言える人間でありたい。

「卒業文集より」

皆川真祐子

私が中国を感じた初めての経験は、小学6年生の時に中国からきた転校生の文集からである。

彼女は容姿端麗で、もの静かで、話しかければ静かに笑顔を浮かべるような穏やかな女の子だった。中国から日本にきたばかりで、日本語がほとんど話せなかったから、話しかけられても笑顔を浮かべる他なかったのかもしれない。

日本語が話せないからといってクラスに馴染めないといったこともなく、十人にも満たなかったクラスの女子に彼女はすんなりと馴染んでいった。給食はみんなで一緒に食べ、休み時間はみんなで大縄をし、みんなで楽しい学校生活を送っていた。ただ授業は、日本語がまだ分からない彼女だけ、別の教室で日本語の授業をしていることがままあった。

6年生になると、大きな行事がたくさんある。その中の一つが連合運動会だ。区内の小学校全てが一つの競技場に集まり、競い合うのだ。種目は多々あり、高飛び、ハードル、1000メートル走、リレーなど多岐にわたる。みな自らのベストを更新出来るように、いい結果を残せるように、懸命に挑んでいた。しかし、区内の全ての小学校の6年生が参加するとなると、その中で入賞することは厳しく、私の小学校から何らかの種目で入賞したという人は誰もいなかった。入賞しなくても、懸命に頑張ればそれでいい、自分で納得出来る結果であったならばそれでいい、というモチベーションであった。

彼女が出場していたのは1000メートル走だった。1000メートル走は最も息切れする種目である。彼女は無事走りきり、クラスの仲間から、おつかれさまと暖かく迎えられ、彼女はそれに笑顔で応えていた。彼女の記録がどうであったかは全く覚えていないが、走りきったのは確かだった。

私が驚いたのは、小学校のアルバム文集での彼女の作文である。多くの生徒が楽しかった思い出、6年間の思い出を語る中、彼女の作文の題名は「連合運動会の成果」である。他にも修学旅行など楽しい思い出はあったはずだが、彼女が選んだ題材はこれだった。他の生徒で連合運動会を題材にしている生徒は誰もいなかった。最も衝撃を受けたのは、最後の一文だった。内容は、走り終えた後、友達がいろいろ声をかけてくれたが、学校のメンツを失ったみたいで、私は後ろめたい気持ちになった、というものだった。

衝撃だった。卒業文集とは、楽しかった思い出を書き連ねたり、友達に感謝の気持ちを述べたり、中学校への希望を書き連ねるものではなかったのか。後ろめたい気持ちがした思い出を綴っていたのは彼女一人だった。なにより、6年生になって転校してきた彼女が、学校のメンツを失ったと感じ後ろめたい気持ちになっていたのが衝撃だった。他にクラスで学校のメンツを意識して挑んでいた者ははたしていただろうか。みな、個々人が頑張っていて、出来るだけの記録が出せば良い、敢闘すればいいと漠然と考ただけで連合運動会に臨んでいたと思う。しかし、彼女は、競技後、私たちのねぎらいの言葉があまり頭に入らないほど。後ろめたい気持ちを感じていたのだ。そして、その思い出を、小学校生活を通した一番の思い出として文集綴ったのである。

卒業して、彼女の作文を読んだとき、彼女と、彼女の故郷中国のことをおもった。きっと中国では、自分のためはもちろん、学校のためにも、高い誇りをもって、いかなるものに挑んできたのだろう。私たちのように、それぞれが頑張ればそれでいいといった温室のような、はたまた甘っちょろいような環境では過ごしてこなかったのだと思う。何事も負けてはならない、勝負の世界できっと彼女は生きてきたのだ。もしかしたら、良い記録を出せていない自分自身にねぎらいの言葉をかけてくる私たちを、また、良い記録を出せなくてもならん恥じることなく笑顔でみんなの元に帰ってくる私たちを、彼女は不信に思ったかもしれない。中国は日本と違

い、幼くても厳しい環境で闘わねばならないのだ、と強く感じた。

「隣の席のあなたと」

讀井知

一瞬のうちに広がる光とバリバリバリという爆音。そして、華やかな光と音が去った後に残される沈黙と陰影。

世界的現代アーティストの蔡国強さんの手にかかる火薬は時間を閉じ込める力を得るのだろうか。爆発は物や生命に終焉をもたらすものと思っていたが、目の前の映像では作品は爆発によって永遠の生命を吹きこまれていたのである。—

私は横浜美術館で開催されている、『蔡国強展・帰去来』を見にきていた。蔡さんは火薬を用いたアートで有名であるが、今回の展覧会では作品に加えその制作の様子が流されていた。

実は、蔡さんの作品に出会ったのは今回が初めてではない。今から約一年半前、福島県いわき市に来た際に、蔡さんが制作に携わった「いわき万本桜プロジェクト」が行われているいわき回廊美術館を訪れた。

若いころ日本に留学していた蔡さんは、いわきの人々と共に生活をともにし、また制作活動を行っていた時期があるそうだ。いわきの方々は蔡さんとの思い出を、温かさを感じる方言で熱心に私に話してくれた。「自分たちはアートのことも分からないし、中国のこともよくわからない。でも、そんなの関係なかった。みんなで一生懸命一緒に汗を流して感動を共有した。それで十分だった。」ということを抑っていた。

そして、世界的に有名なアーティストとなった今も、震災後にはこうしていわきに足を運び一緒に復興の願いを込めてプロジェクトを進めてくれていることに感謝と感激をしていた。

私は友人も大学の先生も中国人の方が多くいる。とても素晴らしく尊敬できる自慢の方が多いには違いないが、それでもまだ、私の中にはまだ中国に対して決してプラスではない偏見が存在していることを否定できない。その原因は何なのだろうか。

日本と中国は国家規模でたくさん問題を抱えている。そのせいもあってか、両国民はお互いに必ずしもプラスのイメージを持っている人ばかりではなく、さらに相手国の人々が自分達にそのように感じていることも知っている。そうして、自分達には直接なんの利害関係も生じていない人達までもが相手国の方を色眼鏡を通して見るようになってしまった部分があるのではないだろうか。

その結果、私たちは普段、個人間の違いを国の違いと感じてしまうことが多いと思う。食い違う価値観を国の違いのせいにして、「文化が違う」「分かり合えない」という一言で思考を停止させてしまうのだ。

人間は、往々にして国に縛られた存在なのかもしれない。でも、蔡さんの作品、またいわきの方々との友情によって深く感動した今、「そんなこと、何も気にすることはないのかもしれない。」とも思う。

国が違い文化も違い趣味も興味も違う人達が、ただ出会い、そして協力し合うことで「違い」を超えた感情の交流を可能にしたのだ。そして、その感情の交流が新たな作品を生みだし、今や世界中の万人の心に感動を届けている。

私は座右の銘を「自分の隣にいる人を幸せにする」としている。まずは隣にいるあなたを笑顔にする。大人になるにつれて強さと知識を身に着ければ、世界を広げ多くの人と出会うだろう。そうして幸せにする人を増やしていこう、と。

私の通う大学院には多くの留学生がおり、授業によっては中国人学生の方が日本人学生より多い場合もある。席が隣同士になることも多く、彼らはよく質問をしてきてくれるのだが、分からないことは何も悪いことではないのに、何故だかとても控えめで遠慮や恐縮をしていることが多々ある。そんな時、見えない壁を強く感じ寂しい気持ちになる。数ある留学先の選択肢の中から日本を選んでくれ、希望と志を持ってきたはずなのに心地よく過ごしてもらえないのは日本人として大変悲しい。

不要な色眼鏡をはずして隣国を隣人として見つめ、切磋琢磨することが日中友好に繋がるのだと信じて、隣の席に座ってくれたあなたと同じ方向を見つめて共に学び、よい時代を作りたいと思う。

「一筋の日の光と小さな歩み」

鈴木洋晶

私が大学で中国について学ぼうと決めたのは、高校生の頃に李香蘭の半生を描いた劇団四季のミュージカルを観たことがきっかけだった。李香蘭は、中国人として当時「満洲」と呼ばれる中国東北部で女優活動を行った日本人であり、中国と日本の2カ国を祖国にもつ彼女の半生には深く考えさせられるものがあった。そして、その背景である「満洲」について調べてみたいと常に思いつつもなかなか行動に移せない日々が続いていた。だが今年の7月、私は実際に「満洲」があった中国東北部を訪れ、中国や韓国の学生と共に当時から現在の東アジアについて考えるといったスタディツアーに参加することができた。このスタディツアーでは、事前学習を経て現地へ向かうという構成だった。学習を通して感じた点、現地での交流や訪問を通して感じた点はそれぞれ異なるものであったが、どちらも現在冷え切っている東アジアの関係を溶かしてくれる日の光になりうる重要な要素を秘めていた。

事前学習では、講義に加え、3、4人の班でのプレゼンテーションを各大学に同時中継するというものもあった。私の班は満蒙開拓団に実際に参加した人々や彼らを受け入れざるを得なかった人々についての発表を行った。そのときに痛感したことは、歴史1つ1つは国家だけではなく国民1人1人が関わっている問題だということだ。中学生の頃教科書で満蒙開拓団について調べたとき、満蒙開拓団に参加した人は政策によって半強制的に行かされたか、騙されて行くことを決めた被害者なのだろうという印象を受けた。だが、現地で日本人が他の人種を差別する行動を取らなければ、ここまで現地の人に根強く残り続ける問題にまでならなかったのではと思ったのだ。一見すると歴史の出来事はすべて政府の責任で国民はただ巻き込まれただけと思いがちだが、国民1人1人も当事者なのであることは忘れてはならないと感じた。

また、現地で実際に中国、韓国の学生と歴史問題や現在の国際情勢について話し合うことはこれまでにない機会であった。ある日歴史認識についての話し合いを班で行った際、気まずい雰囲気になってしまったことがあった。話し合い後は皆で食事に行く予定だったが、それも難しいと思わせるくらいの雰囲気の重さだった。だが私の思いは杞憂に終わり、話し合いが終わった後ごく自然に会話に笑いが加わり、夕食後にはカラオケで互いの国の歌を歌い合うまでに至った。この流れはとても重要な要素を持ち合わせているように感じた。つまり、歴史は歴史で忘れてはならないことだと思う。戦争の痕跡があちこちに残る町で暮らす人と、ただ知識として知っているだけの人では戦争への思い入れが変わってくることも考慮せねばならないことだということも、班員の意見で気付かされた。だが、最も大切なことはこれからその歴史をどう活かし、これからの国際関係をどのように良い方向へ持って行くかだと思う。「満洲」に関する歴史について各々の考えを持つ班員が全員賛同した意見があった。それは、「私たち若者は未来に生きるのだから、これからどう東アジアの関係を良

好きなものにしていくかが最も大切なことだ、」というものだった。歴史を忘れないようにしなければならない最も大きい理由は、そこにある歴史問題を解決するためではなく、同じ過ちを犯さないようにするためなのだ。

今回の交流は小さいものであるかもしれない。だが、歴史問題について真剣に話し合え、かつその話し合いが終わると歴史に関係なく親交を深められる関係、歴史は歴史として慎重に扱う一方で、現在の東アジア情勢のようにそれに固執するようなことのない交流こそが今日に求められているものなのではないかと、私は強く感じた。そして、こういった小さな交流を積み重ねていくことで、各国間の関係も良くなっていくのでは、という考えが安直なものではないことを実感することができたスタディツアーであった。

「蘭州の学生たちと私の三年間」

丹波恵里佳

私が中国の蘭州という町で三年間を過ごすことになったのは本当に偶然でした。当時、交際し始めたばかりの相手から、「中国での大学教員の仕事を紹介してもらったんだけど、なんなら一緒に行く？」と切り出されたのです。ある日、突然、電話で。まるで週末の映画にでも誘うかのように。本人は冗談のつもりで言っていたというのは後から聞いた話。でも、その時の私は何を思ったのか、「うん、行く」と答えました。それこそ週末の映画にでも行くかのように。

当時の私は就職して三年、仕事自体に手応えを感じ始めていたとはいえ、日々の延長線上にぼんやり見えてきた将来に何となく閉塞感を抱いていたのかもしれない。その返事を予想していなかった彼も、話が現実味を帯びていくにつれ真剣に考え始め、中途半端な関係のままはよくないということで二人は結婚。こうして、それまでの人生でまったく御縁の無かった中国の、名前も聞いたことのなかった蘭州という町での新生活が始まったのでした。2012年、小さな島を巡って両国の関係が近年で最悪となった、その年に。

幸運なことに私も教師として仕事させてもらえることになり、九月には新入生の授業を受け持つことになりました。中国の大学では必ずしも希望した専門分野を学べるわけではありません。私たちが在籍していたのは日本語学科。日中関係が最悪な中、学びたくもない（であろう）日本語を勉強させられる（であろう）学生たちに対して私ができることは何か。一生懸命考えました。でも、そう簡単に答えは出ませんでした。中国の一部の人たちの日本人に対するイメージは想像以上によくありません。市場で買い物中に突然「日本人は中国から出て行け！」と怒鳴りつけられたこともあります。でも、表面だけヘラヘラと取り繕うようなやり方が、彼らが初めて出会う“生”の日本人としての、私の目指すべき姿でしょうか？私のできることはただ精一杯、誠実に接することだけかもしれない。でも、それさえも否定されたら？私は祈るような気持ちで初回の授業に臨みました。

ところが、私のそんな心配はまったくの杞憂でした。中国語の苦手な私の、それよりちょっとマシな程度の英語での自己紹介にも学生たちは熱心に耳を傾け、和気藹々と進んでいく授業。回を追うごとに、急速にお互いの距離が縮んでいく感覚。日本には無い“先生の日”、教師節に、照れ屋の班長がはにかみながら差し出してくれたカーネーションの花束。覚えたての単語や文法で、たどたどしく、でも一生懸命に書かれた「先生、ありがとう。今、私たちは日本語が大好きです」というメッセージ。

私の急な帰国が決まった時、大事な試験前にも関わらず代表の学生たちが食事会を開いてくれ、参加できなかった学生たちも私のために自習室で撮ったビデオレターを贈ってくれました。一番慕ってくれていた男の子。人づてに私が蘭州を去ることを聞いた途端、言葉を失い、「何でもっと早く教えてくれなかったんですか？私

は大切な人と離れることは、本当に、本当に苦手です」と絞り出すように言ったきり、声を上げて泣き続けたそうです。時折、「恥ずかしいのに」って、泣きながら照れ笑いを浮かべて。

私にとっての「中国」はそんな彼らであり、蘭州での日々です。蘭州で出会ったあの子たちは、もしかしたら隣人というより、弟や妹？今、私は日本での生活を再開していますが、中国に行く前と比べると、いろいろな出来事や出会いの意味をより生き生きと感じられるようになった気がします。きっとこの先も、私は日本で真面目な社会人として生きていくことでしょう。そんな私にとって、蘭州での日々は宝石のように懐かしく輝き続けることでしょう。蘭州でのことを思い出す度、私はあの子たちに恥ずかしくないように、いつか胸を張ってまた会えるように、前向きに生きようと思うのです。

★入選

「透明な壁」

山崎顕吾

喫茶店でアルバイトをしている最中、お客さんから苦情を言われた。行ってみると、そのお客さんの隣の席に中国の方が四名、賑やかに談笑している。中国人同士であるから勿論中国語である。苦情を伝えにきたお客さんが言うには、マナーがなっていない、ということだった。騒がしくて迷惑だ、注意をして少し静かにさせてほしい。そういう趣旨のことを述べ、最後に「これだから中国人は」と、付け加えた。私は苦情を受け、店員という立場上、声の調子を抑えてもらうよう中国人のお客さんをお願いをせざるをえなかったが、何故だろう、すっきりとしない。苦情の最後に付け足された言葉に、じりじりとしたもどかしさを感じた。私自身が謂れ無き中傷をされたかのように。

吐き捨てられるように付け足された「これだから中国人は」という言葉には、言った人が意識しているかどうかはともかくとして、侮蔑したような響きがある。少なくとも私にはそう感じられた。ちょうどその頃、私は五週間の北京留学から帰ってきたばかりであり、余計に敏感になっていたのかもしれない。しかし、実際に中国に行って現地の人達とふれあってきたからこそ言えるのだが、「これだから中国人は」は明らかに偏見である。

とはいえ、かくいう私自身も、実は中国留学の当初、マナーについて悩まされることが度々あった。地下鉄に乗れば、声を張り上げて携帯電話手に通話している人がある。「やはり中国」と思った。その他にも公共の場で、大声で話をしている人を目にする度に、「さすがは中国」などと思ったりした。

北京に滞在して3週間が経った頃、以前東京で日本語を学んでいた友人の盧さんが、私達が北京に来ていると聞いて、会いに来てくれた。そして、北京の横丁、いわゆる胡同を案内してもらった。胡同は人、人、人。まさに喧々囂々、行き交う人たちが大声で話しながら歩いている。私の語学力が低いせいもあって、周囲の会話の内容が理解できず、声の調子を聞いている限りでは喧嘩をしているようにしか思えなかった。よほど私の表情がこわばっていたのであろう、盧さんはそんな私を心配してくれ、次のように言ってくれた。「日本とは様子が少し違うかもしれないけれど、みんな喧嘩をしているわけではなくて、仲が良いだけ。仲がよくなればよくなるほど声も大きくなるの」。

その時、私は文化の違いを体感したような気がした。今までにも文化の違い、異文化という言葉は耳にはしていた。だがそれは、観念にしか過ぎなかった。文化の違いを生々しく体感したその瞬間、北京に来た当初、心に湧いた「さすがは中国」「やはり中国」という思いは、一種の偏見であることに気がついた。「日本ではこ

んなことありえない」、無意識のうちに「日本では」という先入観で向こう側を眺めていた。無論、それではあちら側まで見通せるはずがない。盧さんの言葉は不意打ちだった。一つの事象でも、違う角度から見れば全く違って見えてくる。「喧嘩しているように見える」と「仲が良さそうに見える」とでは正反対だが、何がそうさせているかということ、それこそ文化の違いである。ある中国人の友人がこんなことを言っていた。日本の電車は車内がしんとしていて圧迫感を感じる、と。きっと「中国では」ありえないのだろう。周りに迷惑をかけまいとする日本人の気遣いが、かえって気詰まりになっていたようだ。

自文化中心という透明な壁。見えづらいからこそ頭をぶつけやすい。摩擦なく交流するためにも、まずはその壁を認識することが大事だと思う。今回の短期留学で実感したが、実際に触れあってみるのが大切だ。異文化を直に体験したその時、透明な壁の存在に気づくだろう。物理的に近くにいても、声に出して近づかないと心の距離は縮まらない。日本人同士だけでしか通用しない以心伝心ではなくて、「以言伝心」「以行伝心」、これが透明な壁の扉を開く鍵になるだろう。

「世界一、人情の厚い国」

木村麻莉子

「フィンランドは政治的清廉潔白度が世界一で、人は正直だから好きだ。中国とは正反対の国だね。」と、フィンランドで出会った日本人の友だちが言った。私はこの夏、台湾とフィンランドに行く機会を得た。どちらも素晴らしい所だった。フィンランドでは、美しい建物や自然に心動かされた。フィンランド人の友だちは、サウナナイトやパーティーを開いてもてなしてくれた。

しかし、それ以上に温かいおもてなしを受けたのは、台湾の方だった。私が中国語を勉強していることを知ると、台湾の友達は、単語カードを作って持ってきてくれ、発音練習をしてくれた。バスの中でも、chī や rě の発音が出来るまで、何度も何度も付き合ってくれた。毎日、色々な友達が、昼食と晩御飯におすすめのお店につれて行ってくれ、どんな料理があるのか丁寧に教えてくれた。観光ガイドもしてくれた。晩御飯をおごってくれ、帰国の日にはお土産までくれた台湾の友達もいる。人は親しみやすく、優しかった。お土産で高山茶を買った店の店主は、「学校帰りに、いつでもお茶を飲みに寄っていいよ。」と声をかけてくれた。「中国は世界一、人情の厚い国だ。」と、私はフィンランドで出会った日本人の友達に言った。友達はそれを聞いて、驚いていた。

内閣府が昨年12月20日付で発表した、「外交に関する世論調査」では、中国に「親しみを感じない」とした回答が83.1パーセントで、調査以来最悪の数値を更新したと言う。フィンランドで出会った日本人の友達のように、中国の暮らしや文化を知らず、日本への抗議活動や領土問題、歴史認識の報道を見て、偏ったイメージで中国を捉えているからだ。日本と中国がお互いに親しみの感じる国になるためにはどうすれば良いか。その鍵は、自分にもあると思う。

私の通う東北大学には、たくさんの中国人留学生がいる。中国の文豪、魯迅が留学していたことの影響が大きいらしい。その魯迅が仙台を去り、帰国した後も忘れず、師として敬愛の念を捧げた人に藤野先生がいる。藤野先生は魯迅の解剖学の先生であり、彼のノートを全部朱筆で添削し、色々面倒を見てくれた。このことは、祖国を離れ、異国の土地で自分の他に同胞もない魯迅を感動させた。「かつて、軍国主義の日本は、どれだけ中国に対して害をもたらしたか。魯迅は、その罪悪を心から憎んだが、一人の日本人とは、常にふれあい結びついていたのだった。」新村徹の『魯迅のこころ』に書いてある。

魯迅が藤野先生に感銘を受けたように、日本を訪れた中国人が日本人の親切さや街の美しさに感銘し、日本人と日本を好きになってもらいたい。今の時代、日本を訪れる中国人は多く、私たちの行動が国家の評価につながる。東北大学にもたくさんの中国人留学生がいる。初めて日本に来た人は、日本のことを知らない。中国人留学生にバスの乗り方を聞かれた。整理券に書いてある番号は何か、バスの中の掲示板に書かれている番号は何か、バスの掲示板の文字はなぜ六と九は漢字で書かれているのか、運賃はどうやって知るのか。台湾で、私をもてなしてくれた台湾の友だちや魯迅を愛した藤野先生と同様に、思いやりの気持ちを持って中国人留学生に教えた。

以前、中国人留学生と日中友好に関して話している時、「日本に行く中国人は多いけど、中国に行く日本人、特に若者は少ない。中国には美しい自然があるから見において。日本人も中国のことを知って欲しい。」と、言われた。実際に中国に行き、この目で見て確かめて、中国に対して正しい理解を身に付けることも鍵であると気づかされた。

日本と中国の交流の歴史は2000年以上もある。今、一部の人が互いに反感を持つが、実際に交流する場になると、お互いに尊重しあう。この先、人と文化交流が盛んになり、お互いに親しみを感じる国になって欲しい。世界一、人情の厚い、隣人なのだから。

「友達のいる国に爆弾は落とせない」

中西刀麻

「日本のみんなに出逢えて本当に良かった。日本人みんな優しいと中国で伝えたい」。私にとって初めての中国人の友人である田雨（デンユイ）さんが言っていた言葉が今も中国について考える際に思い出される。

田雨さんと出会ったのは2012年の夏の頃であった。彼女は短期のインターンシップで上海から日本に来ていた学生であった。私たちはあるNPO団体の活動を通して知り合い、彼女を含む何人かの学生と一緒に観光地などを訪れたりした。

田雨さんとの会話は日本のどこが好きかであったり、中国に旅行に行く際のおすすめの場所など本当に普通のよくある日本人と外国人の会話であったのを覚えている。彼女は日本の文化が好きで、将来は日本で働きたいと言っていた。

田雨さんの日本滞在は、平日はインターンシップ、週末は私たち日本の学生とどこかへ出かけるといった具合であった。

私の大学生として初めての夏休みは驚くほど早く時間が過ぎ、気付けば田雨さんの帰国の日がやってきていた。私たち学生と田雨さんはその頃にはすっかり打ち解けていて、空港で別れを惜しみつつ彼女を見送った。

あの日本への抗議活動が起きたのは彼女の帰国から一ヶ月が過ぎた頃であった。デモが起きている最中に私は少しためらいを感じながらも田雨さんに連絡して、中国の現状がどのようなものを聞いてみた。「なかなか厳しいね」と一言だけ返事がきて、しばらく連絡が来なくなってしまった。連絡もできないくらい厳しい状況なのかと私はとても心配した。

数日後また彼女から連絡が来て、田雨さんは日本が好きであること、日本との戦争になるのが怖いということ、そして最後に日本での暮らしで関わった人への感謝の気持ちを伝えてくれた。「日本のみんなに出逢えて本当に良かったです。日本人みんな優しいと中国で伝えたい」。「政治家は喧嘩しているけど私たちは仲良く仲良く」。騒ぎのニュースを追っているなかでこの言葉にどこか救われたような気がした。その当時は中国の人

全員が日本を敵対視し、怒っていると感じていたため、たった一人でもそのようなことを言ってくれる人がいたことに安心させられたのだと思う。

その頃日本でも中国のデモに対抗するように反中国の言論が目立った。そして身の周りの多くの人が少なからずそのような言論に同調しているように思えた。そのような中で、ネットなどで出回っている反中国の意見や、友人の誰かが言っていた中国へのネガティブな気持ちに同調しかけていた私を引き止めたのは田雨さんの存在であり彼女の言葉であった。どこか中国を嫌いになれないのである。

ある時にどこかで聞いた言葉で、「友達のいる国に爆弾を落とそうとは思わない」というものがある。私は田雨さんとの出会い、2012年の日本への抗議活動を通してこの言葉の意味を強く実感させられた。ある国に敵対心を持つということにおいては戦争もネット上での中国批判も同じである。

果たして現在中国をネットなどで強く批判している日本人たちには中国人の友人がいるだろうか、友人がいなくとも中国の人とまともに会話をしたことがあるだろうか。国というものはそこに住む人一人一人によって成り立っているものであるのに、そのうちの一人も深く知らないのではないか。日本人による中国への批判の正体は、あまり知らない相手への不信ではないだろうか。

インターネットを使って誰が言ったかわからない情報を信じ、相手の顔の見えない中で批判することの多い若い世代の私たちこそ、現実の世界で、自分の目で見た中国、中国人と向き合っていくべきである。

中国と日本の人と人との直接の交流を増やしていくことが未来の日中関係の構築に必要である。まずは中国人の友達を作ること、そして中国に関心を持つことが、相互理解の実現への第一歩である。将来私が社会で活動していくなかで、このような相互理解の輪を広げていくことに貢献できたら幸せである。

「世代を超えた日中の交流を目にして」

山本直人

元々私にとって、中国は敵意を感じる国ではなかった。北京・香港で同世代の学生と交流を行い、言われている程日本と中国に違いはない上、親しみを持って接してくれる仲間だと肌で実感できたからだ。ビジネスコンテストの副賞として訪問した北京大学では、数時間ごとに大学生が代わる代わるもてなしてくれた上、時間が終わる時には名残惜しそうにメールアドレスと中国 SNS のレンレンのアカウントを教えてくれた。高校生記者として訪問した香港では、現地の高校生とバドミントンをしながら、一緒にご飯を食べつつ、日本のお笑いの話をしたり、逆に中国での学校生活の話の聞いたりして過ごしていた。

これらの交流は、敵意よりも愛情を、断絶よりもつながりを、私に感じさせてくれた。

そしてこのような同世代との出会いから数年が経ち、私は日本で小学生向けに、独自のロボットとアプリを使ってプログラミングの教育を行っていた。幸いにも、その教室を上海で開催する機会を得て、上海の小学生向けに1日プログラミング教室を開くこととなった。たくさんのロボットとタブレットをスーツケースに詰め込み、中国語を満足に話せないながら用意した教室だった。そこで私は、世代を超えた、日中の親密さを感じることとなった。

開催する前はとりとめのない不安に駆られていた。以前の北京、香港では同世代だったから、友好的に思ってもらえただけなのかもしれない、子供ながらに日本への嫌悪感を抱いているのかもしれない、などと思って、尻込みしていた。

実際は全くの逆だった。

子供達は老師！と大きな声を張って、ロボットをたくさん脇に抱えた風変わりな渡来人を迎えてくれた。さながらたくさんのおもちゃをつれたサンタクロースに見えたのかもしれない。つかみはぼっちりだった。

しかし、私は中国語を、話せなかった。だからお互いに、身振り手振りでなんとか伝えるしか無かった。現地の大学生が手伝ってくれたものの、子供達が自分の所に来るのに、しっかりと伝えてあげられないのは辛かった。

しかし、その状況も時間と共に変わっていく。プログラミングを教える手段としてアプリを使っていたが、子供達はそれをコミュニケーションの手段に変容させた。ここはどうすればいい？と聞く代わりに、アプリをせさせと動かし、最後のクエスチョンマークは目で語りかける。これが私と彼らのコミュニケーションの方法だった。

持って行ったアプリやロボットを使いながら、何としてでも話してくれる子供達の姿を見ることができたのだった。それはジェスチャー以上のものだった。国を超えて、さらには世代を超えたコミュニケーションが、新しい「プログラミング」という形で、結実したのである。

これに、私は痺れた。こんな使い方を想像していなかっただけに、心底驚き、感動した。日本での教室では、日本語が通じるからこそ、このような体験は終ぞ無かった。中国での教室で、それを日本人の私が行ったからこそ、初めてこの体験が生まれたのである。そうしてプログラミングを素早く学んでいき、楽しそうに学ぶ姿を見て、私は新しい世代の萌芽を肌で感じる事が出来た。

確かに中国と日本の間には政治的、歴史的、軍事的な断絶が未だに厳然と存在している。それが解消されるのか、もっと決定的にひどい方向に行ってしまうのかは分からない。だが、私は悲観していない。国の違いはもちろん、世代の差まで超えてこうやってコミュニケーションが取れるなら、間違いは起こらないと、そう思っている。日本と中国をつなぐ架け橋は、一度は壊れることもあるだろう。しかし橋はまた新しく造られ、使われ、そしてまた壊れて、新しいものが生み出される。だからこそ、一時的な崩壊があったとしても、悲観するのではなく、また新しい橋の創造に、期待を込めて見つめていきたい。そう思っている。

「2030年の約束」

村上恵理

その出会いは突然訪れた。まるで稲妻のように私の心を打ち、それが今後の私の人生を、こんなにも大きく変えるとは思ってもいなかった。それは確か2年前の夏だ。私は毎日の生活に飽き飽きし、刹那的な日々を送っていた。この頃の私の関心といえば、自分の内面や外見に関する悩みであったり、辛い過去へのトラウマであったり、とにかく自分のことにしか興味がなく、他者に関して思いをめぐらしたりすることも減多になれば、当然の如く政治問題や社会問題にも無関心だった。そんな私の考え方を一気に変えたのは、一人の中国人少年だった。彼との出会いはとあるインターネットの掲示板だった。彼は最初のうち、自分が中国人であることを明かさなかった。何度かメールのやりとりをしていくうちに、彼とは気が合うことがわかった。ある日彼は、思いつめたように自分が中国人であると明かしてきた。その頃の私は中国に対して無関心に近く、「へえ、いいね！！」といったような返事を送った。しかし彼からの返事に私は啞然とした気持ちを隠せなかった。

「実は僕、中国人であることにコンプレックスを感じている」。この一言から始まり、彼はいかに自分が日本に憧れ、日本に行くため一人死にももの狂いで勉強してきたかを語りだした。その日本語は日本人の私よりも流暢で、彼が今までどれだけ勉強してきたかを物語っているようだった。当時私は21歳。彼は19歳だった。

しかし彼は日本と中国の歴史や政治に対して大変精通しており、彼の議論にその頃の私はただただ頷いているだけの状態だった。そんな自分が情けなく、恥ずかしく思えたのは、その時がはじめてだった。それまで私は自分が一日本人であるという意識に欠けており、ただ流されるままに生きてきたとあってよい。一人の中国人少年の胸の内を知り、私ははじめて自分以外を想い、考え、勉強しようと決意をした。彼とのやりとりは1年間ほど続いた。電話越しで日本語の歌を得意げに歌ってくれたり、日中の歴史について論議しあったり、時に喧嘩もした。その一日一日は、とても濃くて、生きていると実感するような日々だった。彼との最後のほうのやりとりで、私たちは2030年、桜の木の下で再会しようと約束をした。まるで季節が変わるかの如く、彼とのやりとりもなくなった。しかし、私の心にはしっかりと中国に対する興味が植えられた。それは年年歳歳想いが増していき、まるで私の中で元々眠っていた感情が目覚めたような感覚に陥った。彼がのこしていた数々の言葉は、私が中国を知ろうという原動力になっていった。まるで彼からバトンを託されたように、私は中国語を勉強するようになり、中国人の友人と対話する機会にも恵まれた。私は今、彼、彼女等と対話することが何より嬉しい。なぜなら、彼らのしっかりとした意見や、歴史に対する考え、そしてこれからの日中関係について、私は対話をすればするほど必ず分かり合える日はくると確信するからだ。一日本人として真摯に歴史を学ぶにつれ、いかに日本と中国に深い歴史があったか、そして日本人として償わなければならない過去があるか痛感させられる。私は悲しい過去を二度と繰り返してはならないと心の底から決意をしている。そのために出来ることを日々探している。今はがむしゃらに中国語を勉強し、中国人の友人と心を割った対話ができるように努力をしている。なぜなら、それがいつかの私のように、誰かの心を変えるきっかけになるかもしれないからだ。今では私にとって中国は自分の生涯を掛けて勉強し、日中友好に尽力していきたい大切な存在だ。2030年、桜の木の下で見る景色が平和であるよう、私は日々努力する。その時は彼に心からありがとうと伝えたい。そして尽きぬ話しの続きを中国語で話したい。これが私の夢の一つなのだ。

★佳作

「隣人『中国』と私～私の狂人日記」

山本勝巳

「大丈夫でしたか？」—中国に留学していたことがあると言うと、決まって帰ってくる言葉だ。自分の想いと温度差のある反応に、マスメディアが映し出した中国像が浮かぶ。まるで別世界の存在でもあるかのよう、隣人中国について質問をして来る人に、最後は必ずこう答える「優しい人もいます。百聞は一見にしかず、行けばわかりますよ。」

留学後の想いとは正反対に、私と中国の逢いはひどく消極的なものだった。英語は苦手、漢字なら何とかなるかもとの理由で、地元の中国語が学べる大学に進学した。安易な選択の結果、1年次には必修の中国語を落とす有様だった。卒業すら怪しい状況から、10年間も中国と関わり続け、今は大学職員として留学生の面倒を見る仕事をやっているのは、やはり中国留学の影響が大きい。

最初は何も出来なかった。スーパーでの買い物、市場での値段交渉、バスの利用方法…生活習慣の多くが日本と違っているのに、それを中国語で説明されても語学力の不足も相まって混乱するばかり。困り果てる私に、容赦なく中国語で話しかけてくる中国人に嫌気がさした。

そんな日々が続く中で、気晴らしに出かけようと地下鉄へ。小額紙幣・硬貨がなく、自動販売機で切符を買おうと20元札を入れるも、何度入れても払い戻される。3、4度繰り返すと、後ろにいたおばさんが「入れ

る向きが違うのよ」と私の札を取り上げ、代わりに切符を買ってくれた。お礼を伝え、行き先が同じ方向だった事もあり、一緒に乗車、短い間だが弾むように会話ができた。微かな自信が芽生えた瞬間だった。

この時感じたのは、今まで自分はどこかで外国人というポジションに甘えていたという事だった。日本人は外国人と見ると身構えたり、普段とは違った対応を取る。一方中国人は、外国人にも普段と何も変わらない形で接してくる。怒るにせよ、親しくなるにせよ、同じ土俵に立って向き合ってくれる事が嬉しかったし、自分で勝手に壁を作っていた事を恥じた。

内向的な一面を取り除くのに、中国のあいさつ習慣を学べた事は大きかった。留学先の大学の守衛さんが「ご飯食べた？」と話かけてきた。「朝は学生食堂で饅頭を食べた」と答えたら、「これはあいさつで『食べた』とだけ答えればいいよ」と教えてくれた。聞けばその他にも「どこ行くの?」、「何するの?」等いろいろな表現があり、冗談から話かける事も中国ではあいさつ的一种らしい。

日本のあいさつは、相手や場面に依りて変化し、最後に一礼をするのが常識だ。相手への敬意からの一礼だが、形式的な面もあり、人間関係の深みは醸し出せるが、広がりを感じないし、封建的な感すらある。対して中国式あいさつは多様性と同時に汎用性があり、それらはコミュニケーションの多角化をもたらし、人と人とを結び付ける効果があると感じた。

「何のためにあいさつをするのか?」—私は様々な人と交流の輪を広げて行く事が「あいさつ」本来の目的であり、つまり「話しかける」ことに他ならないと思いついた。そこで、今まで何気なく繰り返して来た習慣を改める決意をした。結果として「あいさつ」は様々な場面で威力を発揮し、長距離列車の車上で旅行先の地図をくれたおじさん、日本帰国の朝までカラオケで歌い明かした友達に至るまで、心温まる出逢いを与えてくれた。

これらの出逢いは、中国人の中には日本を嫌いな人もいるが、その数以上に日本を好きな人がいる事を私に教えてくれた。残念ながらこの事はあまり知られていない。先日も勤務先の大学で日本人の友達が出来たと笑顔で話す中国人留学生がいた。自分の行動範囲、半径 5m で新たな日中関係が動きだしている。

留学時代に書き記していた「北京留学狂人日記」を読み返し、その後の 10 年間に積み重ねてきた中国人との交流を胸に溢れるほど思い出しながら、今心から思う。「付き合ってみなければ何も始まらない。日中の子どもを救え…、彼らの未来のために。」

「良い『隣人』であるには」

吉崎晴香

中国は様々な意味を含む「隣人」である。

地理的な「隣人」—以前上海へ旅行に行った際、飛行時間の短さと運賃の安さに驚愕した。今まで報道の中でしか見て、聞いたことがなかった中国という国の中に、こんなにもすぐに、簡単に入ることができるのだと実感した。

競争相手としての「隣人」—些細な出来事に関する中国国内でのニュースを見てみると、頻繁に「日本」という文字が目に入る。同じアジア圏だということも影響しているだろうが、よく日本を引き合いに出して物事を比べることが多いと感じる。日本に対するライバル意識だけではなく同胞としての意識もあるのではないかと思う。GDP や経済的にはすでに中国の方が上をいっているが、これらの面以外でも日本を意識していると思うと、何だか少し嬉しくなった。

文化的な「隣人」—周知の通り、漢字を意思疎通の手段として用いているのは、ほぼ日本と中国だけと言って良いだろう。中国語を勉強していると、発音は分からずとも何となく意味が分かる文章に遭遇することがある。こういう時、中国と日本の近さを実感させられる。また、最近では日本のアニメや漫画に興味を持って日本を訪れたり日本語を勉強したいと思う中国人が多かったりすると感じる。もちろん今や中国だけではなく様々な国の人々がアニメや漫画に興味を持っているが、特に中国人が多いのは、こういった「近さ」も関係しているのではないだろうか。

歴史的な「隣人」—日本と中国は、古代から現代に至るまで、常に何らかの関わりを持って来た。それはある時は良い関係、ある時は悪い関係であったが、やはり一番現代に影響を残しているのは、日本が中国を侵略し始めた近代から現代にかけての戦争ではないだろうか。今の政治的、領土的な対立は、この戦争を発端としていると言えると思う。長い間共にアジアの歴史の一部を作ってきたからこそ、「隣人」より「優越」していなければならないという論理が働いたのかもしれない。

以上のように、中国と日本は切っても切り離せない関係の中にある「隣人」なのである。過去でも「隣人」であり続けたし、これからも「隣人」であり続けるはずだ。今現在の日中関係は歴史的に見て特別に悪いというわけではない。しかし、より良い関係を築き、それを継続していくのに今欠けていると思われるのは、日中相互の信頼と尊重だと思う。互いを信頼することで見えてくるものはたくさんあると思うし、尊重することで気づき直すこともたくさんあると思う。信頼し尊重した結果、相手の長所、短所が顕著になり、そこを理解した上でうまく付き合っていく道を見出すのが大切だと思う。

こう考えたとき、私はこういう考え方は、組織の中での良い人間関係の作り方と似ているのではないかと気づいた。「国と国の関係」ではなく「人と人との関係」の延長だと考えればうまくいくのではないか。国と言っても結局は大勢の人の集まりであり、国を動かしているのも人間である。今自分がこういう行動をしたら相手はどう思うか、相手にこういう行動をされたら自分は思うか—日常生活で考えられていることを少しだけ拡大して考えてみればよいのではないだろうか。

「永遠の隣人とわたしと」

松坂茉留

“自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ”

この言葉を見る度、日中関係について考えさせられます。

あなたは中国が好きですか？嫌いですか？後者にお聞きします。中国人にひどいことを言われたり、暴力をふるわれたりしたことはありますか？なぜ日本人に同じことをされても、日本人嫌い！とならないのでしょうか？

私が小学校低学年の頃、中国産のウナギが問題になりました。学校で中国産のものはダメだと教わり、中国やChinaという字を避け、次第に偏見を持つようになりました。

高校生になった今、とある女の子の話を聴きました。「中国人」というだけで差別され、挨拶をしても無視をされ、いつも一人で下を向いて「さよなら」も言わずに転校したと。それを聴いたとき、どこかで見たことある光景だとぴんとききました。あることないこと噂され、挨拶をすると周りの人同士が目で合図し、近くを通ると舌打ちをされている中学生までの私。地面の汚れしか視界に入るとないとき、本当は、「どうしたの？」「大丈夫？」って話を聴いてほしい。「そんなことするような人じゃない」って言ってほしい。

もっとみんなと沢山お喋りしたい-と思っていたこと。しかし、その SOS は届くことなく卒業を迎えました。きっと気づいていたのに、逆らえば自分もいじめられるとみて見ぬふりをした人もいたでしょう。なんて人間は愚かなのでしょうか。「中国人」というだけで自分と同じ思いをしてほしくない、何か自分にできることはないだろうか。そう考えていたある日、日中友好のヒントを見つけました。

きっかけは中国人のホームステイの受け入れです。発音が魅力的でなんとなく勉強し始めた中国語。それを活かすチャンスがほしいと頼みました。始めは家族全員、「中国人か…」と反対しましたが、必死に頼み、一人の女の子を受け入れました。私以外の家族全員は中国語が全く分からないため、彼女にとって、私は唯一の拠り所でした。いくつか印象に残ったことがあります。私が虫に刺され、「痒い!」と中国語で「やん!」と言ったとき、彼女は驚いたように振り向きました。なぜなら、彼女の苗字は「楊(やん)」だったからです。

また、お風呂で「これはお湯だよ。」という意味で「湯」を中国語読みした時です。「湯!？」と聴きかえされました。理由は中国語で「湯」は「スープ」という意味だったからだそうです。お風呂のお湯は「洗澡水」だよ。言われたときに異文化を感じました。なぜなら、私の中で水は冷たいという概念しかなかったためです。

このように文化の違いや言語の壁はありましたが、言葉が通じた時はとても嬉しくなりました。この嬉しさが日中友好につながるかも!言語が世界を変えるのか!

でも違いました。見送りの時、私の母は泣いていました。ほとんど会話できなかったのになぜ泣いているの?と聞くと、母は言いました。「報道で中国人は凶々しいイメージしかなかった。でも、楊溪は奥ゆかしさがある。茉留と並んでいると姉妹に見えてきた。わが娘のようで情が移っちゃった。この娘のおかげで中国に興味湧いた。」と。

言葉は通じなくても、心で通じる何かがあったのだと思います。帰りの車で私の隣には誰も座ることなく、部屋に戻ると布団が二つあるのにそこにいるのは私一人。心にぽっかり穴が開いたようでした。たった3日間で家族のようになれるのか-たと言語や国籍が違ってても。でも、母は今でも言います。「あの時ほど中国語を勉強すればと後悔したことはない。もっとコミュニケーションをとりたかった。」と。

今は中国語を勉強していると冷やかされ、「中国は行かない方がいい」と言われますが、自分の経験と共に語学を学ぶ意義を伝えていきたいと思います。

雨に打たれようと土砂降りですぐぬれになろうと絶対負けない。いつか必ず虹が見える日が来るから。

永遠のお隣さんである中国と日本を結ぶ虹。私はその架け橋になりたいです。

「忘れられない中国体験 ～中国の友だちと歩いた湖南百公里毅行～」

古川裕樹

湖南省の長沙に留学していた時のこと、ある日、中国人の徐先生が、「面白いイベントがあるので一緒に参加しませんか?」と声をかけてくれたのがきっかけで、私は「湖南百公里毅行活動」に参加することになった。このイベントは長沙から株洲まで2日間かけて100kmもの距離を仲間と一緒に歩くイベントである。高校の頃、長距離走をやっていた私は、持久力に自信があったので、喜んで参加することにした。

当日は朝7時すぎに出発し、徐先生や湖南師範大学、湖南大学、中南大学の友だちと一緒に歩き始めた。日本語を勉強している友だちも参加していたので、私は中国語や日本語を交えて会話をした。彼らは日本の簡

単なあいさつや、流行語を知りたがっていたので、いくつか教えてあげた。私はみんなから中国の流行語を教えてもらった。みんなと一緒に話しながら歩くと、あつという間に時間が過ぎてしまう。楽しくて充実した時間だった。

中国の道を歩いているといろんな発見があった。道路の傍らで牛が放牧されていたり（日本ではこんな光景はあまり見られない）、今回のイベントがあることを聞いてお弁当を販売しにくる人がいたり（美味しいお弁当だった）、歩きながらいろんな景色を見ることができた。普段バスや鉄道で移動するよりもより深く中国を観察することができ、自分の足で歩くことの大切さが分かった。

一日目は湘潭まで 60km 歩いた。全長 100km の行程は、大きな橋を渡ったり、靴がドロドロになってしまうような泥だらけの道を歩いたりして、本当に山あり谷ありのコースだった。50km を過ぎた辺りから足が棒のようになり、足にまめができ、さすがに疲れてきた。そんな時に徐先生がみんなにチョコレートを配ってくれたので、それを食べて元気を回復し、歩き通すことができた。

二日目はゴール地点の株洲体育館まで 40km の道のりを歩いた。みんな筋肉痛で疲れていたが、励まし合って歩き続けた。午後 6 時を過ぎて辺りは真っ暗だった。待ちに待ったゴールがいよいよ見えてきた。100km を達成したときは飛び上がるほどうれしかった。私たちはゴール地点で記念証書もらった。私はこの記念証書と一緒に歩いた友だちのサインをしてもらった。この時の喜びは今でも忘れられない。

中国に留学中、私は日本ではできない様々な体験をした。もし日本でずっと過ごしていたら、友だちと一緒に 100km を歩き通すようなことはなかっただろう。自分の肌で直接感じる中国、本やテレビ等のメディアを通じて知る中国、私の中には、さまざまな中国のイメージが入り混じって存在している。けれども、自分にしか体験できないという点において、留学中に私が肌で感じた中国のイメージは何よりも大切なものであった。

大学の講義、岳麓山の景色、橘子洲、臭豆腐の香り、可愛い犬や猫、活気溢れる人々、宿舎のおばさん、大学で仲良くなった友だちの顔。中国は私にとってかけがいのないいっそう身近な存在となった。

今年の夏、私は再び中国に行き、安徽省の黄山に登った。山頂近くの宿で出会った山東省の青年は頑張って日本語を勉強しているという。「あなたは日本人ですか？12月に日本語能力試験があつてね、今度は一級を受けます。」彼は笑顔でこう話しかけてきた。私自身も中国語の検定を目指して勉強中だということ話し、互いにがんばりましょうと励まし合って別れた。帰国後、関西空港のシャトルの中で「また中国に行つてみたいなあ」と思った。

日中交流というと、あらたまった感じがするが、実際は自分の周りの人々とコミュニケーションをとるといふ私たちが日常でも当たり前に行っていることである。日本人だろうが、中国人だろうが、あまり関係ないことだと思う。大切なことは、喜びや苦勞を共にし、分かち合うことではないだろうか。

「横山先生と就職と中国と」

林桃代

私は大学4年の後期から1年間中国の鄭州に留学していた。

鄭州、と聞いて何人が中国のどこらへんにあって、どの省に所属しているのかわかるだろうか。だいたいの方は見当もつかないだろう。わたしは河南省鄭州にある鄭州大学で日本人学生として1年間中国語を学ん

だ。多くの中国人学生と交流し、日本では知りえない多くのことを学んだ。この充実した留学生生活を陰ながら支えてくれたひとがいる。それが横山先生だ。

横山先生は鄭州大学の日本語学科の先生であった。であった、というのは、先生が私が日本に帰国すると同じく、ここでの教員生活を終えてしまったからだ。先生は鄭州で9年間中国人学生に日本語を教えることを通じ、日本の文化を伝えていた。

9年間、それはわたしにとってとても長く感じられる。鄭州は日本人にとってけっして住み良い場所ではない。旅行に行くには良い場所だが、留学のように長い期間過ごすには精神力の高さと我慢強さが求められる場所だ。ここには北京や上海のように日本のスーパーやコンビニがあるわけでもない。長い間日本で暮らしてきた人にはとても過酷な場所だと私は考える。そんな場所に9年間暮らし、学生にひたすら日本語を教えている人がいる。この事実はわたしが鄭州に来なかったら一生知りえなかつただろう。

先生はわたしにたくさん日本語を勉強している中国人の学生を紹介してくれた。わたしは中国人学生の高い日本語能力と親切な心に助けられ鄭州での留学生生活を楽しめたのだ。なので、横山先生は私にとって恩人である。

すべての時間を横山先生は中国人学生に捧げていた。学生ひとりひとり雑談する時間を設け、それを毎日続けていた。中国の大学は先生も生徒も同じキャンパス内の寮に住んでいるのでお互いの存在はとても身近なのだ。学生はみな横山先生の誠実な態度を知っていて、尊敬していた。彼らの心の中で横山先生という存在は常本を考えるうえで常にひとつの基準になるだろう。私はその考えに至ったとき、横山先生がしていることの偉大さを知り、同時にそれを知っているのが自分だけであることに気付いた。

多くの学生はスピーチコンテストなどで私は日中の架け橋になりたい、と言う。気持ちはとてもわかる、しかし具体性がなく夢物語のように感じていた。しかし、わたしは横山先生がまさに日中の架け橋だと思っている。9年間という途方もない時間をただひたすら学生に日本語を教えていた。先生を慕う生徒はいつか日中関係に大きく貢献しうる架け橋になるだろうと思うからである。残念ながら、先生はご自身の体調と日本に残してきたご家族のことを考え、今年7月に鄭州を去ってしまわれた。日本語学科の学生の悲しみを日本にしながら感じる。

しかし、横山先生はわたしに教えてくれた。自らが、多くの架け橋を生む立場になるというあり方を。

鄭州に留学している間感じたことがある。それは日本語学科の学生がとても優秀であり、しかし日本に留学できる生徒がたった一人であるということだ。

「自分の目で確かめること」

鴨下綾花

誰もが無意識のうちに持っているものの見方がある。それは、育った環境やメディア、教育などの様々な社会的要因から形成されている。

今日、日本を訪れる中国人は増加し、経済的にも深い結びつきがあることは沢山の人が感じている通りだ。しかし一方で、相互間で相手国を好意的に見る人は決して多くはなく、イメージも後退しているのが現状である。私は、このような中国観・日本観も、意識せず抱いてしまっている見方の一つだと思うのだ。

こう言う私も、中国へ対して良い印象を持っていなかった。父の極端なアジア嫌いという家庭環境の中で育ったことや、テレビに映し出される環境汚染や品質問題、中国人観光客のマナーに影響を受けたことに加えて、実際に中国人と交流する機会もなかった。そのため頭の中でイメージだけが先走りしていたのだろう。

この私が中国に関心を寄せ、好意的に見るようになったのは、ある先生の一言がきっかけだった。「——ええ。好きですよ。」先生中国好きなんでしょ？というクラスのムードメーカーの問いに目を輝かせて答えたのを今でも鮮明に覚えている。私は、中国が好きという言葉に、驚きと戸惑いしかなかった。後から知ったことだが、その先生は実際に中国を訪れた経験があり、卒業論文に書いたテーマは近代という困難な時代に両国を繋ごうと努力した外交官についてだという。今は高等学校の教壇に立ち、自身の見聞を発信している。先生はなぜ中国に好意を持つのだろうか。また同時に、自分はなぜ中国に嫌悪感を抱いていたのか…。私は疑問に思うようになった。それ以来、当時高校生だった私は歴史の教科書のコラムに目を向け、様々な文章に触れるようにした。大学に入ってから第二外国語で中国語を選択し、アルバイト先で実践・交流する機会を大切にしている。

こうしたことで見えてきたのは、今までとは違う中国の姿だった。怖い、反日、マナーが悪いといった偏ったイメージは先入観でしかなく、両国の間にある複雑な出来事に関しては対話が試みられているということが自分の中で明らかになった。外国人観光客が多く訪れる私のアルバイト先では、中国人のマナーが悪い、とよく話題になる。だが、中国語で一声かければほとんどの人がルールを守ってくれるのは言うまでもない。

日本にとって、中国は大きな隣人である。隣人であるが故、距離感を保ちにくく、衝突しやすいのかもしれない。だがしかし、裏を返せば、これは地理的・歴史的に深く長い交流を培ってきたとも言えるはずだ。大学で仲良くなった中国人留学生はこう言っていた。「日本の政治家は嫌だけど、こういう交流は別だよ。」私は実際に中国へ行ったことがある訳でもなく、言語もまだまだ勉強中だけれども、この言葉を聞いたときに、表面ではぎくしゃくしている日中関係も、水面下では繋がっているのだと強く感じ、安心した。

中国を学び、伝えてくれた高校の先生や、中国から訪れた留学生・観光客との出会いがなかったら、こう考える自分はいなかったかもしれない。今、民間交流の中に必要なものは、実際に自分の目で確かめ、見て感じたものを発信していく行動ではないだろうか。こうして、実際に交流し現地を見る人が増えれば、的を射てない虚像との実像のギャップを埋め、より良い相互理解を導くはずである。私もその担い手になりたい。

「変わらぬもの」

濃野司

私と中国を繋ぐもの。それはある学生団体との出会いである。

私は現在、就職活動を控えた大学3年生である。友人との会話で、どのような事を選考会で面接官に話せば良いか分からない、という声をよく耳にする。しかし、私は来年の就職活動で何を面接官に訴えかけるかを既に決めている。

2年前、私は大学生になって初めての夏休みをどのように過ごそうか思案していた。知己から、あるプログラムへの参加を誘われたのは丁度そんな風にあれこれ考えていた時だった。

「東京で日本人と中国人の交流合宿をするから参加しないか？」かねてから両国を取り巻く歴史認識問題について関心があった私は二つ返事で参加を決めた。これが私の学生生活を予想もできない方向へと誘った「日中学生交流団体 freebird」との出会いである。

この学生団体は2005年に上海で設立され、上海・関東・関西に支部を持つ（2013年当時）「日中の学生交流の場を創出する事」を目的とした学生団体である。日中両国の学生が多く所属している。私が参加した交流プログラムはfreebirdの基幹事業であり、設立から毎年日中交互に開催地を替えて行われている。

討論会や成果発表会など、緻密に計算された1週間のプログラムの内外で、私は国境を超え新たに出て来た中国の友人に、関心事であった歴史認識について率直に尋ね、相手の意見・認識に真摯に耳を傾ける事が出来た。

相手も同世代である。取るに足らない話題から、敏感な話題まで本当に気兼ねなく、存分に意見を交わらせる事が出来た。そこに見たのは、メディアによって伝えられる少し変わった「隣人」ではなく、自分達と大きく変わらない「隣人」の姿であった。

私がこのプログラムから得た見識、感情、そして各地より集った友人達は、私が今までまるで井の中で暮らしていたかと思わせるほどに世界を広げてくれた。

非常に感銘を受けた私が、この団体に籍を置くようになるまで、そう長い時間は要さなかった。大学二年生になると、関西支部の代表も務めることとなった。

時は移ろい、2015年の交流プログラムの開催地に私が代表を務める関西支部のお膝下、京都に決まった。そして迎えたこの夏は、2014年に新設された北京支部も加わり4支部、日中両国から約40名の学生により交流プログラムが催行された。

例年、日程の終盤に地域一般の方へ向けて、交流プログラムの中で学んだ事を全参加者が発表する場を設けている。

この発表は両国学生が混在した数チームが、参加者のみの力で発表内容の選定から結論の落とし込みまで行う。出会って1週間程度、ましてや国籍の違う人間同士が議論し、発表できる形にまで持って行く事の困難さは想像に難くない。

中には明け方まで続く議論の中で、感情が昂ってしまう参加者もいる。それでも不思議な事に、毎年最も評価の高いコンテンツはこの発表会とその準備である。

私はその理由は簡単な事だと思う。皆が同じ一つの目標に向かって、邁進する事に国籍、背景、思想の違いなど意味を持たないのである。そこにあるのは、仲間であり信頼できる「隣人」である。

思い返してみると事業の準備にも同じ事を言えるだろう。日本人・中国人など関係なく、お互いの得手、不得手を補い合いながら一年間という長い時間をかけて一つの目標に向かって心を合わせる日中各支部のメンバーは、苦楽を共にした真の仲間であり、私たち運営側もある意味で交流活動を行っていたのではないだろうか。それも知らず知らずの内に進んでいた本当の意味での信頼を醸造する交流である。

異なる角度からの物の捉え方、そしてそれを受け入れること、同じ思いの前には他の事は大した問題でないこと。たった3年ではあるが、以上が「隣人」から私が学んだ全てである。

就職活動を経て、私はもうすぐ社会へと旅立つ。学生と社会人。ステージは変わろうとも私は私の理想を持ってこれからも「隣人」と付き合い続けて行く。

「回想記一雨傘革命に思いを寄せて」

水野裕大

見慣れていた道路は、色とりどりの無数の雨傘で埋め尽くされていた。横殴りの雨の中に彼らは立っていた。傘は雨除けのためというよりは催涙ガスをしのぐためだった。テレビに映る、香港の人々が「真の民主主義」を手に入れるべく戦う姿は力強かった。「雨傘革命」と人々はそれを呼んだ。僕の心は哀しみの涙に濡れていた。——分かり合えない哀しみよ。

僕は三歳から12年間という、人生の半分以上の年月を香港で過ごした。そんな僕にとって中国は、いつも隣人であると同時にどこか遠い存在だった。多感な時期を過ごした香港は、僕の中国に対する見方に多分に影響している。

「香港と大陸は全然違うよ！」

当然と言わんばかりに答えられた。日本人学校に通っていた僕が以前、現地の学校と交流した際、その学生にふと聞いた時だった。あの頃は中国でメラミン混入粉ミルク事件が起きた後で、香港で売っている安全な粉ミルクが大陸人に買い占められたりして、香港の人々の反感が強くなっていた時期ではあった。

列に並ぶのは香港人、列に割り込むのは大陸人。電車内で（携帯電話に向かって大声で話すときを除いて）静かなのが香港人、飲食をしたり子供が土足で座席の上に立ったりしても注意しないのが大陸人。なんとなく中国人に対して良くないイメージを昔から抱いていた。「メインランダー」はどこか得体が知れず、怖いもんだとばかり考えていたからデモが起きたときも「やっぱりな」って変に納得してしまう自分がいた。

そもそも「香港人」と「大陸人」ってなんだろう。香港に十何年も暮らしていたから、向こうの人々の視点を無自覚に、そして無批判に受容していた。大して中国のことも知らず、というよりは知ろうともせず中国に対して偏屈な価値観で判断していた。香港で起きたデモは、香港人と大陸人は根底では何が違うのか、など現地に住んでいた頃はほとんど気にならなかったことについて改めて考える契機になった。何より僕は、香港の人たちがあれほどエモーショナルだったのか、ということは今さらながら知って驚いた。彼らに対してどちらかというスマートで静かなイメージを持っていたからだ。12年間住んでいて自分は香港の人々のことでさえ何も分かっていなかったのだ、まして中国人については言わずもがなであった。そもそも中国のことを深く知りたいと思ったのは、なにも去年の香港で起きたデモに始まったことではない。日本があの島を国有化して以降、日中関係は緊張状態が続いている。自衛隊のスクランブルのニュースを見るたびに、いつか一触即発で取り返しのつかない事態になってしまうのではないかと、という不安が脳裏をよぎった。僕の興味・関心は自ずと中国に向けられた。そんなこんなで大学では日中関係史を学ぶ少数人数制の授業を受講した。

「片方だけの情報で物事を判断してはいけません」中国人の先生は僕におっしゃった。ハッとさせられた。さりげない言葉だが、僕の偏狭な価値観はいとも簡単に打ち砕けた。僕は香港でも、そして日本でも中国側の意見や情報を受け入れようとしていなかったことに気付かされた。

先生の教えは一見簡単そうで、意識しないとできなかつた。しかし両方の視点で物事を捉えると、今まで歴史問題や靖国問題などで一方的に「中国が悪い」と思っていたものが、そうは言い切れないのではないかと、もっと日中が理解を深める余地があるはずだ、など視野が一気に開けたのだ。

父の仕事の関係で、僕は図らずも中国との繋がりを持つことになった。そして僕の未来は中国と共にある、そうでありたい。将来を担う僕らのような若い世代だからこそ、中国との正しい相互理解が求められている。

この先も先生の言葉を心に留めながら、中国・香港で素晴らしい経験に恵まれた自分だからこその形で、日中の明るい未来に貢献できたならなんて幸せだろう。分かり合う努力、雨傘革命に思う。

「ゴシップとしての隣人『中国』」

了舟隼人

正直なことを言うと、私は中国という国をろくに知らない。大気汚染にコピー製品、格差社会、チャイナドレス、三国志にパンダ……中国と聞いてパッと出てくる言葉はこんなところだ。

「中国に対して、自分はどう思っているんだろう」ふと日頃の言動を思い返してみた。私を含め、私の周りでは中国と言えば会話のパターンは大概決まっている。

例えば友人との会話、話題が中国製品の話題になったとする。

「中華クオリティでしょ。どうせすぐ壊れるんじゃない？」そんなジョークを言って終わりである。中国の話題が出て、何となくマイナスのイメージを二、三語って終わるのである。そこには深い思いも考えもない。中国という言葉はただのマイナス記号と化していて、深く考える話題ではない。もし、その製品の質が悪いとすれば、なぜ悪いのか？ 中国で製品に求められるものは、日本と違うのかもしれない。そうした、突っ込んだ考えをすることはほとんどない。

隣人の噂話をするとき「何々が目につく」とか「何々が耳にさわる」とかそんな話をするだけで、実際に関わりを持つとしたり、理解しようと思うことはない。そして、気に入らないからと言って正面から悪口を言うわけでもない。この場合、隣人に求めているのは「盛り上げられる話題であるか」なのである。すごく近くにいながら、単なるゴシップとしか扱わない。考えてみれば、それが私にとっての『隣人「中国」』だった。

恥ずかしい話だが、こうした関心のなさや付き合いのなさが両国間の歴史認識の問題につながっていると思う。正直、戦時中のことを教科書や大臣、メディアなどが何て言おうと信用することは出来ない。どうしても、両国の思惑や偏った思想が入ってしまうだろう。それよりも、戦争を経験した人々の想いを受け止めるほうが、本当の意味での歴史問題の解決につながるはずだ。

小学校の頃、終戦記念のイベントで母親に広島に連れて行ってもらった。被爆者の方々が自ら戦時中の暮らした被爆したときのことを語るイベントだった。その時に原爆ドームなどの平和施設も訪れたのだが、一番強烈に記憶に焼き付いたのが被爆者の方による講演だった。爆風で背中一面に窓ガラスが刺さったこと、熱でただれた皮膚のこと、辛そうに歩く人々がまるでゾンビのようだったこと。被爆者自ら語る原爆体験は、小学生だった自分には恐ろしい話だった。しかしその話を聞いて以来、私の頭の中には戦争反対という想いが深く刻み込まれているし、それは受け継がなければならないと思っている。直接話を聞くということは、文字とか写真など記録以上の重さを持つのだ。

歴史の記録文書や大臣たちの発言なども大切かもしれないが、記録や大臣が国なのではない。人々が集まって国である。その人々の想いを受け継がずに、国の歴史や友好を語ることなど出来ないはずだ。私達は政府の意見云々の前に、まず当時を知る人々の話を直に聞き、想いを伝承しなければならない。

戦争以外の問題や、これから起こる問題についても同様である。私達一人ひとりが、中国の人々と顔を合わせて、各々の想いを受け止める必要がある。そのためには、今まで通りの噂の種やゴシップとしての「隣

人」ではいけない。幸いにも現在、中国人観光客が増加して中国と接する機会が増えている。この機会を活かして、お互いが関心を持って話し合える「隣人」になりたい。

「私にとっての中国」

岸本美樹

私の初めての海外は高校生の時、中国だった。私はこの時に中国に行ったことがきっかけで大学で中国について学ぶことを決めた。

その初めての中国訪問の目的は、囲碁の交流大会のためであった。幼い頃から囲碁を習っていた私は、ある大会で入賞を果たし、囲碁の本場である中国で福岡県代表として現地の選手達と対局する交流大会の参加資格を得た。

当時、私は中国に対してあまりいいイメージを持っていなかった。というのも、私はずっと北九州市に住んでいて、光化学スモッグやPM2.5の影響で運動会が中止になったり、頻繁に訪れる中国人観光客が夜に街で大きな声で話したりしているところを見たりするという経験が何度もあったからだ。また、連日流れるニュースや新聞などのマスメディアは中国に関連する報道で日中関係の悪化や、中国人観光客のマナーの悪さについてなど、中国にマイナスのイメージを持たせるような報道ばかりをし、私は今まで一度も行ったことのない国であったにもかかわらず、中国人はみんなそんなのだという意識が自分の中にうえつけられていたのだ。

そんな中国に対していいイメージを持っていなかった私でも、日本人が持つ中国のイメージに驚いたことがあった。それは中国に行く際、同行してくれた県の職員の方がPM2.5の対策としてマスクを支給してくれたのだが、そのマスクがとて大げさなものだったということである。最近ではマスクも機能性を重視した超立体マスクなどが販売されているが、支給されたそのマスクはそれよりも更に大きく、硬く、つければ顔の半分以上が隠れてしまうようなものだった。確かに、それはとても機能性の優れたマスクであって、県の代表として中国に行く私達の安全を考えての支給だったということは理解できたのだが、街につけて出歩くには不向きな上、室内競技である囲碁をしに中国を訪れた私達にこれほどまでに大げさなマスクが必要なのだろうかと感じ、「中国の大気は本当に汚れているそうです。」と話す職員の方の説明を聞きながら、本当にこのマスクをつけなければいけないほどなのか、という疑問が私の頭に浮かんでいた。

私は中国に5日間滞在したが、予想通りテレビのニュースで見るとなほひどい黄砂の日はなく、普通のマスクで十分で、その大きなマスクをつけた日はなかった。

もうひとつ中国にいて印象に残ったことがある。それは中国の選手と対局するために、私達と同行してくれていた中国人の通訳の方が、日本語で私達に話しかけてくれている時はとても優しく控え目な声であるのに、中国人の人と中国語で会話している時は人が変わったかと思うくらい声の音量や話す速さが上がっていたことだ。当時は不思議だったが、今は中国語を勉強していて、中国語で会話する時は日本語の時と比べて口を大きく開けてお腹から声を出す必要があると知った。

私が中国に滞在したのは5日間というとても短い期間だったが、私の中の中国に対するイメージは大きく変わっていた。私は、国や人というものは、実際に行って、触れて、理解しなければ、分からないものなのだと感じた。大気汚染がひどい、観光客が大声で会話してうるさい、などといったマスコミの報道は一部では正しいが一部では間違っている。中国という国がどんな国であって、そこにはどんな人が住んでいる

のか、などということは、テレビでわずかな時間に流れる映像や新聞の狭い紙面ではとても全てを表現することなどできない。

私はこれから大学で自ら学び、体験することを通して隣国・中国をイメージや狭い見識からでなく、多角的に理解しようと努力し、交流していくことが重要であると思う。

「心の隣人、私の友誼」

藤崎貴行

私にとっての隣人はハルビンという街の方々に他ならない。

私が初めて中国の地を訪れたのは大学2年生の夏の暑い日のことだった。大学の留学プログラムを利用し4か月間の日程で北京を訪れた私たち8名はそれぞれが初めての中国ということもあり非常に興奮したことを覚えている。折しも当時は2008年の北京オリンピックで中国全土が沸いていた時であった。王府井や天安門広場にはたくさんの観光客が詰めかけていて人々の熱気を肌で感じる事が出来た。

それから半年が経ち、就活を始める前の私は中国へ二度目の留学に行く決心を固めた。以前は同じ学部と同級生と一緒にのお祭りのような留学生活だったが、今回は一人きりの挑戦であった。しかし不安は不思議と全くなかった。少なくとも初めて北京を訪れた時に感じた戸惑いのようなものは今回感じる事はなかった。それには少なからずこれが二度目の中国であるからということもあつただろうが、最も大きな理由はこれが私の住む新潟の姉妹都市であるハルビンという街だからというのがあげられるだろう。冬になれば新潟のように雪が降り、郊外に出ると自然が大きく広がっている。しかしふと街中を見渡すとそこかしこに東洋の雰囲気を感じる事の出来る、そんな不思議な街がハルビンである。

私はこのハルビンでの留学で3人の忘れられない友人と出会った。一人は一番最初のルームメイトになったヤクーツク人である。彼は私が留学に来る何年も前から中国で勉強をしており、来たばかりの私を何度となく助けてくれた。『ハルビンは何も無いから、勉強しないとイケない俺には最高の場所なんだよ』浅黒い肌で快活に笑う彼は幾度となくそう私に話した。彼とは1か月間かけて鉄道で東北ハルビンから中国最南端の海南島まで放浪旅行をした。

もう一人は最初のクラスメイトで隣の席だったベラルーシ人である。彼は留学生寮のロビーで夜の11時近くまでビールを飲んでいるような破天荒な人物だったが、非常に思いやりがありクラスのムードメーカーであった。私が彼と拙い中国語で会話をする様は初級クラスの老師の笑いを誘ったものだった。

最後の一人が私の留学生生活をほぼ一緒に過ごしてくれた朝鮮族の少年である。彼は日本語学科の学生であり、大半の朝鮮族がそうであるとおりに、非常に優秀な人物であった。中国で開催された日本語のスピーチコンテストで優勝した実力があり、私が日本に戻った後も、彼は日本を訪れる時はよく私に会いに来てくれる。孔子の言葉で「有朋自遠方来」というものがあるが、住む場所が離れていても忘れない友人がいるということは非常に嬉しいことだ。

学生時代の留学期間は併せて一年半余りだろうか。卒業を控えた4年生の夏には『漢語橋』という中国語コンテストの湖南省での決勝観覧にも招待して頂いた。その時には中国語を学ぶ学生が欧米や東南アジアといった世界中から集まり、交流する機会を得た。日本と中国という視点でしか考えることばかりだったが、それからは世界と中国という視点に気づき更に意識が高まった。

時が経ち、大学を卒業した今、私は中国系航空会社で働いている。学生時代に中国の各地を旅行した経験は今でも中国を訪れる知識として役に立っている。昨今の訪日観光ブームにより日本を訪れる中国人の数は

急増し街中で中国語を聞くことも多い。仕事柄、中国人と触れ合う機会は多いが、皆一様に日本を褒めることを一つ二つ話してくれる。今はQQや微信といったツールで簡単に中国とコミュニケーションが取れるし、中国のニュースや映像もインターネットで簡単に見る事が出来る。これまで中国と関わりを持つことのなかった日本人にとっても日中が繋がりがやすい時代になってきている。私も一人の隣人として今後も友情からの日中友好が続いていくよう努力をしていきたい。

「やっぱり中国人も日本人も変わらないよ！」

ターン有加里ジェシカ

正直に言って、私は中国のことをほとんど知りません。長い間、中国という国に接点を持ったことはありませんでした。強いて言うならば、ニュースからの情報に加えて、理由もなく中国を嫌う祖母からの意見が私にとっての中国との接点でした。そういった状況が一転したのは大学に入ってからです。中国語の響きに惹かれて大学で中国語を勉強し始め、クラスでトップの成績を修めるほど毎日中国語を暗唱しました。まだ中国語を話せる段階ではないけれど、中国に行って実際の中国人の生活に触れてみたい！と思い、大学二年の夏に中国旅行を計画しました。しかしお金が足りず行くことができませんでした。もっと前から用意しておけばよかったと後悔しましたが、仕方ありません。そんなとき、偶然「リードアジア」という日中学生交流連盟によるプログラムを紹介してもらいました。

今年のリードアジアでは、9日間、日本人学生と中国人学生が東京に泊まり込んで様々な企業を訪問したり、ディスカッションしたり、文化交流したりしました。私にとって一番魅力的だったのが、日本に初めて来る中国人学生と関われるという点です。私が日本で知り合った中国人は皆、日本語が流暢で日本の生活にも慣れていきます。本人たちがよく言っていますが、彼らの考え方や行動は「ジャパナイズ」されています。一方で、初来日する中国人学生は日本を中国からしか見たことがありません。そういった学生と交流することで、中国に実際に行けなくても、少しは「ジャパナイズ」されていない中国を知る良い機会になるのではないかと考えました。

中国を毛嫌いする祖母にはプログラムの参加を反対されました。しかし、祖母が何と言おうと私は参加する気満々で参加費ももう払っていました。少しでも祖母を説得するにはどうしたらよいかと知恵を絞った結果、「中国人も日本人もそれほど変わらないから大丈夫」という言葉が出てきましたが、そのような理由で祖母を説得できるはずはないし、正直なところ、私自身も「中国人も日本人もそれほど変わらない」は嘘かもしれないと思いました。多くの日本人、特に私の祖母は、「日本人は大人しいが、中国人はうるさい」や、「日本人は他人を思いやるけれど、中国人は自分本位だ」と言う風に日本人と中国人を違うものとして認識しているように思えます。私もそういう認識を持っていました。—リードアジアに参加するまでは。

リードアジアでの9日間、中国人学生と本当に仲良くなり、くだらない話から日中関係に関する堅い話まで色々話し合いました。その中で日本と中国の文化の違いに驚くことが何回かありましたが、一番驚いたのは、中国ではむやみに「ありがとう」を言わないと教えてもらった時のことです。それを聞いた瞬間は「日本人は他人を思いやるけれど、中国人は自分本位だ」というプログラム参加前に抱いていたイメージが脳裏に浮かびました。しかしよく話を聞いてみると、相手を敬遠していると取られかねないから、親しい相手にはむやみに「ありがとう」を言わないのだそうです。自己中心的で感謝する気さえ起きないからなどというわけではなく、むしろ、他人を思いやるからなのです。理由を聞いて「中国人は自分本位だ」などという根拠もないイメージを抱いていた自分を大変恥ずかしく思いました。結局「中国人も日本人もそれほど変わらな

い」というのは本当でした。どちらも同じように他人を思いやるのです。もちろん、中国人学生と話していると考え方が少し違うなと思うことはありましたが、たくさんの中国人学生と話す中で気付いたのは、日本人が色々いれば中国人も色々いるから、「日本人」、「中国人」という枠組みでお互いを捉えることはばかばかしいということです。充実した9日間を終え、家に帰って真っ先に祖母に向かって発した言葉は「ただいま」ではなく、「やっぱり中国人も日本人も変わらないよ！」でした。

「日本語の言語空間を越えて」

上山幸穂

先日、東京大学の5月祭で瀬地山角氏の講演を聴講した。主題は「日中韓：隣国との関係をどう築くか/気づくか」領土問題、歴史認識の違いなどを取り上げた内容だ。瀬地山氏はこう述べる。「日本語で日本社会の議論だけを追いかけても、世界の議論はわからない。それは、中国・韓国も同じ構造であり、日本語の言語空間を越えて、相手の言語で対話できる力が重要だ。」帰路につきながら、私はある経験を振り返っていた。

2012年9月、私の通っていた大学が主催する上海での企業訪問・就業体験プログラムに参加した。私にとって2度目の上海。初めて訪れたのは2010年、購買意欲の高い中国人、高層ビルの建設ラッシュ、高度経済成長でエネルギーが溢れた都市に私は魅了された。上海万博が開催中だったこともあり、訪中客の歓迎ムードがあった。

しかし、2年後は違った。ちょうど中国国内で反日ムードが高まっている時期だった。私たちが上海に渡航した直後、日本政府は尖閣諸島(釣魚島)を民間から買い上げ国有化することを閣議決定した。中国メディアも連日このニュースを報道、日本から来た私たちは滞在中に日本人として目立つ行動をしないよう注意する必要がある。幸いにも、同じ大学の中国人留学生達も日本から一緒に参加していたのが心強かった。また、関係者の皆様の尽力で企業訪問・就業体験は予定通り進められ、貴重な経験をすることができた。

就業体験は、日中企業が集まる大規模な商談会のイベントスタッフで、現地の中国人大学生達も一緒に働いた。私は第二言語で中国語を勉強しており、拙いながらも日本の文化など他愛のない話をするうちに、初めて現地の友人が出来た。そんな中、私たちが働いていた上海世貿展館から100m程の距離にある在上海日本国総領事館で反日デモが開催されているという情報が耳に入った。私はその現場に近づくことはできなかったが、現地の中国人大学生が、領事館付近のデモの様子を携帯電話の写真を見せて説明してくれた。私の語学力では聞き取れなかったので、日本から一緒に来た中国人留学生の友人に通訳してもらおうと「反日デモは、上海でも一部の人が行っていることで、皆が反日なわけではない」といった内容を話していることが分かった。中国人留学生の友人も「日本と中国の関係は”政冷経熱”こうして反日デモが行われている目と鼻の先で日中のビジネス交流が盛況なもの象徴的だね」と話していた。その後、私たちが日本へ帰国したときには、反日関連報道が過熱しており、私も周囲の人に中国で怖い目に遭わなかったかと大変心配された。

あの時、私は様々なギャップを感じた。2つの言語空間で生じているギャップ、日本の内側にいるだけでは気づけなかっただろう。日本の報道と中国の報道では、同じニュースでも切り口が違うし、聴衆が受ける印象も異なってくる。そもそも報道自体、実際の現場を見た人の主観と同じとは限らない。中国で生まれ育ち、日本社会で暮らす中国人留学生は、多感な時期からこのギャップと向き合ってきたと思う。そして、このギャッ

プを埋めていく先導者もまた、両方の言語空間に身を置く者なのだ。

隣人「中国」は、言うまでもなく日本にとって政治的・経済的に重要な存在だ。今日では、政治的課題だけでなく中国経済の失速も懸念されているが、経済を下支えするためにも、日中の民間交流を通して国民同士の理解を深めることが大事である。訪日客の増加でより身近になっている隣人、インターネットを使えば在中国の人ともリアルタイムで繋がれる時代だ。私たち若い世代は積極的に交流するチャンスに恵まれている。

私はこれからも、日本だけでなく中国のメディアや SNS 等に積極的に触れて、語学力と教養を身につけていきたい。そして、両言語空間に身を置く者として、両者のギャップを埋める一助になりたい。

「中国人はホントにマナーが悪いの？」

加藤愛澄

「外国のお客さん、それマナー違反です。」これはある日の京都新聞の見出しだ。京都は神社などの歴史的建造物が多く、日本らしさが溢れる魅力的な都市だ。それが世界でも評価され、2015年版世界の人気観光都市ランキングでは2年連続で1位に選ばれ、毎年多くの外国人観光客が訪れている。その京都で問題となっているのが、トイレトーパーを便器に流さずにゴミ箱に捨てていく、所構わず唾を吐く、公共機関でも大きな声で話す、店頭の商品を破損するなどという中国人観光客のマナーの悪さだ。しかし中国に行ったことがある私にとって中国人のこの行動はそんなに驚くようなことでもない。彼ら自身にはマナーに違反している意識はなく、ただ日本のマナーを知らないだけだと思うからだ。

中国人がよく「日本の街中のトイレが清潔で驚いた。」と言うのを耳にするが、中国ではトイレに紙を流せない地域が多く、設置してあるゴミ箱に捨てるため自然と異臭がちこめているのだ。また、外国での中国人のマナーの悪さは中国国内ではそれほど報道されておらず、日本が自分たちの行動に迷惑しているとは知らなかったという。多くの中国人が日本のマナーの良さに感動するというが、体に染み込んだ習慣は簡単には直せないもので、また自国でも実践しようとは思わないという。

日本人は中国人のそういうマナーに対し、「信じられない、ありえない。」といった反応を示し、「郷に入れば郷に従え」などと中国人のマナーの悪さを批判する。そしてそのイメージだけで中国を悪く言う人までいる。それを私は非常に遺憾に思い、「中国に行ったことがあるんですか。」と聞きたくなる。確かに中国人との交流がない人にとっては観光客が一番身近な中国人なので、悪いイメージを持ちやすいかもしれない。しかし中国人観光客はただ中国にいるのと同じように行動しているのに過ぎないのである。以前韓国のトイレに日本語で「詰まるのでトイレトーパーを流さないでください。」と紙が貼られているのを目にし、日本人のマナーも他国に迷惑をかけているのだと気づかされたことがある。

私たちは、日本のマナーはあくまで国内だけで通用するということを忘れ、日本人のマナーは世界一だと勘違いし、逆に中国人のマナーは悪いとレッテルを貼っている。このマナーの違いによる摩擦の解決の第一歩にしようと、先日京都の嵐山では、中国や台湾の留学生らを招いてセミナーが行われ、企画者はセミナーの最後に「今は相手のことを良く知らず、言葉も通じないので嫌な思いのまま終わっている。違いを知った上で、尊敬の念を持ってもてなしたい」と話したという。

私はこの考えに共感を持った。なぜなら日本と中国の関係は源远流長という言葉で喩えられるように、歴史的に長いつながりがあるが、お互いのことを良く知らないというのが実状だからだ。マナーの問題に限らず両

国に発生している様々な問題を考えていくと結局「、お互いをよく知らない。」というこの点にたどりつくのではないだろうか。中国と日本は隣国同士で、経済的にも文化的にも交流が深いのに、互いにいがみ合ったり、欠点ばかりを探り合っているような気がする。安倍晋三首相の、70年談話にも「より良い未来を切り拓いていく、アジア、そして世界の平和と繁栄に力を尽くす。」とあるのに、日本は隣国ともめてばかりでどうするのと思ってしまう。両国の関係の悪化は私たち若い世代が断ち切らなければならないと思う。中国人観光客の増加に伴い日本を知る機会が増えている今、私たちはこの問題を良いきっかけとして、中国を知る機会を増やし、相互理解へ発展させていかなければならないと思う。相手を理解したうえで相手をもてなすことが、日本人の心からのおもてなしではないだろうか。

「本音の中にある温かさ」

光本恵理

大学入学前まで、私にとって中国はまさに「近くて遠い存在」であった。地理的には近い存在であるが、日本人と中国人の心の間には遠い距離があると感じていた。しかし、今の私は中国人をかけがえのない大切な隣人だと思っている。第34回日中学生会議への参加が私の考えを大きく変えた。

正直に言うと、私はずっと中国に対して悪いイメージを持っていた。中国人の友達も居らず、中国に一度も訪れたことのない私の中国のイメージは、全て報道など人からの情報によって作られていた。従って、中国と言って真っ先に思い浮かぶのは、偽装、真似、汚染、反日感情など悪いイメージだけだった。大学に入学し、第2外国語として中国語を学ぶことにした。しかし中国語を選んだ理由は中国に興味があり、中国人と会話出来るようになりたいなどという肯定的なものではなかった。日本は経済的な面、安全保障的な面で中国との関係が将来的にも嫌でも必要なのだから、学ぶなら中国語が良いだろうという否定的な理由だった。つまり、中国人に対してのイメージは良くないまま中国人の先生の授業を受けることになった。一回目の授業の時、中国人の先生はこうおっしゃった。「日本人はきっと中国に対して悪いイメージをもっているでしょう。けれど、中国人は日本人よりも温かくて、優しいと思います。」中国に悪いイメージしか持っていなかった私にとって予想外の言葉だった。そして、この言葉が本当なのかを実際に自分で感じたいと思い、日中学生会議に参加した。

私は京都を観光している時に1人の中国の友達に「お父さんやお母さんは日本に来ることを反対しなかった？日本のことは嫌いじゃないの？」と聞いてみた。そうすると、彼女は「2人とも日本のことが嫌いだから、日本に行くことを反対した。」と言った。この答えを聞いて、こんなにもはっきり答えられたことに驚いた。私だけでなく、多くの日本人はもし中国が嫌いかと尋ねられて、嫌いだとしても、はっきりと中国が嫌いだと答えないだろう。従って、日本人はこのような解答を聞いたら、相手に対する配慮がないと不快に思うかもしれない。また議論を例にあげても日中間で違いはあった。日本人は議論を行って、相手の意見が自分の意見と違う場合このようにいうことが多い。「あなたの意見は分かりました。確かにそのような意見もあると思います。ただ私の意見は少し違います。」日本では相手の意見を一回肯定して、自分の意見を言うことが評価されやすい。一方で中国人は、自分の意見と違うと即座に「不是」ということが多い印象を受けた。議論、普段の生活を通して、中国人は日本人よりもはっきりと自分の意見を言うと感じた。日本人のように曖昧な言い方をすることはほとんどなかった。

確かに中国人は日本人よりも自分の意見をはっきりと言う。しかし、私は中国人との2週間の生活の中で、

中国人は本当にあたたかくて、優しいと感じた。なぜならば、中国人が自分の意見をはっきりと言うのは、相手を否定するためではなく、相手と真剣に向き合っている証なのだ気がついたからだ。彼らは自分の思っていることを正直に伝え、上辺だけの関係ではなく真の関係を築こうとしていた。相手と意見が食い違い、相手とぶつかっても正直に自分の意見を伝える勇気があった。これが本当の温かさであり、優しさなのだと思う。私は日中学生会議を通してかけがえのない隣人に出会えた。自他と真剣に向き合い、正直な気持ちを伝えることが中国人の温かさ、優しさであり、隣人になる為に不可欠だと教えてくれた中国の友達に感謝したい。

「隣人『中国』とわたし～気が付けば第二の故郷～」

和泉澤大地

以前の私にとって、日中交流とは程遠い存在だった。テレビのニュース、学校の社会科の授業等、脚色のかかったそれらの情報を鵜呑みにしていた。

中学時代は、中国人のクラスメートもいたが、それによって中国に対するイメージが変わることもなく、むしろ友人に対して失礼な発言もしていた。今思えば申し訳ない。

そんな私にまず一つ目の転機が訪れた。

大学1年の冬、当時中学生の弟が、(公財) 陽光美術館と中国の揚州市が主催する、日中の少年交流行事「豆遣唐使」で中国を訪問した。当美術館は、中国本土でも幻の名品といわれるような陶磁器を展示しており、さらには中国の水墨画の大家「崔如琢」氏の作品を日本で唯一展示している。当館館長の関口勝利氏は、日中友好に非常に関心が高く、文化交流を通して、お互いの理解が深まるよう、その土台作りに取り組んでいる。「豆遣唐使」もその一環で、日本の中学生が、遣唐使が辿った道のりを、現地の中学生らと交流しながら体験するというものであった。弟は中国語が出来るわけでも、以前から興味があったわけでもなかったが、訪中時の楽しい思い出をただひたすら語ってくれた。

その後、訪中団の家族として、当館から懇親会に招かれ、関口館長にも面接する機会が与えられた。関口氏は「メディアを通してではなく、人と人との交流の中にこそ、本当の情報が伝わり合う。李白と阿倍仲麻呂のような友情を、現代の若者にも引き継いでもらいたい。」と熱い思いを語った。その言葉に、私は深い感銘を受けた。

大きな「使命感」にかられた私は、翌年4月から中国語の勉強を始めた。2年生の春休みには、復旦大学の短期留学にも行った。そして語学のさらなる進歩を求め、大学の国際交流課にある留学生との交流スペースに赴いた。

そこで二つ目の転機が訪れた。「日中学生交流団体 freebird」との出会いである。

偶然にも freebird に所属する学生がおり、私にその活動について紹介してくれた。当団体は、学生同士の相互理解を深めるために、草の根交流を企画している。毎年夏には、討論会や企業訪問、フィールドワークなどを行う合宿イベントも行っている。言語を学ぶだけでなく、日中友好というテーマに向かって真っすぐに取り組む機会があるのだと、私はとても感動した。

そして3年の夏休みには、その合宿イベント“JAPANTRIP2013”に参加した。7泊8日の日程で、歴史問題などについての討論会、清掃工場や教科書会社などの企業訪問、最終日には一般公開での成果発表会を行うと

いった、盛りだくさんの内容であった。中国人の学生と面と向かって議論し、寝食を共にしたその生活は、たとえ小さな一歩でも、日中友好に必ずつながっていくと確信している。

それからというもの、私は「中国」、「日中〇〇」と名の付く催しには、積極的に参加するようになった。大学でも、中国の留学生に自分から中国語で話しかけるようにし、外食の際にも、中華料理屋に行けば、中国人のスタッフに話しかけたりした。

ここで重要なのは、この行動の原動力となっているのは、もう日中友好への「使命感」というよりも、中国というものへの「親近感」であることだ。何度も何度も中国の人と交流していくうちに、その暖かな人柄や明るさが、ついには家族のような「親近感」を私に感じさせたのだ。

そして、この春、社会人となり、職場では4人の中国人の同期にも恵まれ、日々中国語が話せる環境にある。6月からは、清水隆志氏が経営する日中交流をテーマにしたシェアハウス「パンダハウス」に居住している。普段から中国人などのアジア人とともに暮らすことができるのだ。

親元を離れ、ひとり立ちした今、学生のころとは違った形で、社会人ならではの日中交流活動を楽しみ、模索し続けていきたいと思う。

「隣人中国と日本」

福岡杏菜

ふと、目の前にあるものを手に取ってみるとそこにはMADE IN CHINAの文字。家から一歩外に出ると中国語で書かれた表札がある。

わたしたちは日々、中国と密接にかかわりながら生活しています。しかし、日本と中国の間にある政治的な問題に目を向けると眉をひそめる人も少なくはないはずです。

また、そんな状況を助長させるかのようにテレビでは、日本と中国間の溝を深めるような報道ばかり。「尖閣諸島は中国の領土だ!」「日本人は嫌いだ。」そんな言葉を聞いてわたしたち日本人は果たして、中国に好意を持ち関係を改善したいと思うのでしょうか。わたしは、このような報道を見ているうちに、「日に日に悪化していく両国の関係を改善したい。」という気持ちと同時に「日本人が中国に好意いだききっかけづくりをしたい。」という思いが芽生えていきました。

そんなある日、世界史の授業で興味深い話を耳にしました。「中国は日本に漢字を伝えただけでなく、日本から輸入もしていた。」というものです。日清戦争が終わって間もないころ、日本語に翻訳された洋書を読むため当時の中国は日本に大量の留学生を派遣し、日本独自の漢字、和製漢語を習得したそうです。

わたしの頭の中にある知識では中国から漢字が伝えられた。で完結していました。そのため、とても衝撃を受けたことを覚えています。このことに加えて、和製漢語と呼ばれるそれらの漢字は現在中国では欠かせない文字だということに驚きました。これで、日本と中国が切っても切り離せない関係だと立証された。そう思うと、とても嬉しくなりました。

わたしたちは、過去の出来事に目を瞑りがちです。しかし、異文化の中には同文化があるのと同じように過去と向き合うことで、目を向けなければ決して知ることのできないつながりを見つける第一歩となります。

そして、そのような事例は漢字に限らずあらゆる面で日本文化の中に中国文化が浸透しているということ

示唆しているのだと思います。そう考えると長い歴史の中で中国が日本に与えてくれた恩恵ははかりしれません。逆に日本が影響を与え、現在も中国の中に根付いているものもたくさんあると思います。

数年前から、日本を訪れる中国人観光者数が大幅に増加しています。そして、中国のこうした状況をみて、日本でも中国語を勉強し始めたり中国人観光客を受け入れようとする動きが盛んになっているそうです。

中国というだけで過剰に反応し、批判的な目でとらえていませんか?自分の胸に問いかけてみてください。

一方的な考えが独り歩きしている世の中はあってはいけないと思います。今までの中国に対するイメージを改め、クリアな頭で柔軟に対処していく。こうした一人一人の中国を理解し、尊重しようとする気持ちの積み重ねが日本と中国をつなぐ原動力になればいいと思います。そして同じアジアの国として、ともに歩んできた隣人として両国が強い絆で結ばれることを切に祈っています。

「一人から変えていく日本と中国」

中澤耀介

“Ciao! Sei cinese?” 2013年、私が高校3年の9月から1年間留学したイタリアで何回も聞かれたフレーズである。「あなたは中国人ですか?」私たちは顔を見れば日本人か否かは大概分かることだが、遠く離れたヨーロッパに住む彼らにとって日本人と中国人の見た目の違いなど分かりようのないものであった。言ってしまうと、私たちの違いなど「その程度」のものであった。

私は遠くイタリアの地で、中国に対する印象を大きく変えた同じ留學生の Ming Hui Yu (ミン) と出会った。私たちの間ではイタリア語が共通語であり、共に励まし、支えあった大切な仲間である。留学するまでの私は、マスコミの情報を鵜呑みにし、中国と言えば冷たく、反日思想の人が多いと勝手に思い込んでいた。尖閣諸島問題、各国首脳の発言による駆け引きなど、連日ニュースが報じていた政治問題等からしか中国を知ることがなかった。そんなことなど知らないミンは、私の思いをどんどんと変えていった。昨日学校で起きたこと、ホストファミリーと出かけたこと、自分の好きなバスケットボールのこと、ミンは僕に対してまるで幼馴染の友人であるかのように、特別な話でもなければ気を遣った話などせず、純粋に一友人として話しかけてくれた。当たり前なことと思うかも知れないが、これこそが国際交流の入り口であり、原点ではないかと感じた。

ある時私はミンに対し、一つ質問を試みた。「ミンは日本が好き?」ミンは少し間をおいて、「政治的な問題を言えば、私たちはまだ対立関係にあるね。でも僕は、君たちのような日本人が大好きだし、日本食も大好きだ、ゲームもアニメだって大好き。日本を嫌いなわけがないよ」そう言ってくれた。日本と中国の関係改善は、国単位でできることではないとここで強く知った。ミンは常に世界を国単位ではなく、人間一人単位の視点で見ている。そしてそのことを私に教えてくれたのである。人間一人単位で見ることで、それは遠回りのように見えて一番その国を知る近道である。ミンが私を変えてくれたことで、また一つ本当の日中関係がよくなったのではないだろうか。一人からまた一人。私たちの使命は、両国の関係を私たち自身が学びとり、その繋がりを段々と広げていくことである。

現在、訪日中国人の大幅な増加は驚くべきものである。今年の訪日中国人の数は、昨年の約240万人を大きく更新し、2015年8月の統計時点で330万人を記録している。この要因にはもちろん政府の政策、経済社会情勢も影響しているだろうが、それ以上に我々は大きなチャンスを見い出せるはずである。私たち一人一人が本当の日本の良さを理解し、彼らにそれを伝えることで、さらに相互理解が深まるのではないだろうか。そしてもっと私たちが彼らを知ることで、尊重し合える社会を作りあげていけるのではないだろうか。

隣人「中国」、それは私たちのライバルなのではない。ともに協力し、この複雑化していく国際社会に向けて、よき関係構築を示していくお手本でなければならないと私は考えている。決してできないことはない。大きなことではなく、私たち人間一人単位の行動次第である。小さな線はやがて大きな線に繋がり、いつか日本と中国の本当の絆を私は見れる日が来ると信じている。

日本に帰国し、こうして考えることができたのもすべてミンのおかげである。彼は今、中国の蘭州で私と同じく大学生活を送っている。私はいつか彼の住む街を訪れ、あの時言えなかった言葉を、彼に直接伝えたいと思っている。“Anch’io amo la Cina!” 「私も中国が大好き」と。

『わたしは何をするか』

西村歩

私が通っていた学校に中国からの留学生が編入した。周りに中国語を話せる人物はおらず、何とか英語を話すことができた自分が一番の「友達」だった。幸い英語でコミュニケーションを取ることができた。しかし一つ問題があった。それは、彼がなかなか日本式のマナーを学ぼうとしてくれないのだ。何事も周りの話を聞かず、振る舞う彼に対し、私は愛想を尽かしてしまう時もあった。食事の時間はまさにそうだ。ごはんが入った容器を口につけ、音を立ててかき込む彼の振る舞いは、中国では「食事を作ってくれた方への礼儀」にあたるが、日本では「汚い行為」に他ならない。周りの女子学生は「食べ方が気持ち悪い」と陰口を叩く。日本式の食事マナーを教えても、分かってくれない。

注意を始めてから一カ月経っても、マナーは一向に直らない。思わず私は「いつまでその食べ方を直さないのか」と激怒し、彼の机を思いきり叩いてしまった——。もちろん私の行動は「友達失格」である。彼は悲しそうな声で「もう君のことは知らない」と叫ぶと、学校の外に走り出てしまった。その後彼はしばらく学校に顔を見せず、登校しようにも保健室登校が続いた。

私が彼にマナーを教えていたのは、留学生であったとしても、日本のルールに従うことは当然と考えていたからだ。しかし後に聞くと、彼は「日本式」を教わる毎に、中国人としてのアイデンティティが傷付けられていたように感じていたという。今まで親しんできた中国での習慣が日本に来た瞬間に「異質なもの」と見なされることに苦痛を感じ、母親に「母国に帰りたい」と嘆いていた。私は彼の文化的な価値観を理解しようとしないうちに、「郷に入りては郷に従え」を強要していたのだ。その後は関係を取り戻し、彼から中国の文化や慣習を教えてもらいながら、周囲への理解を促したが、「あの時なぜあんなことをしたのだろう」という後悔の念は拭いきれない。私が多様な価値観を認めることの重要性に気づいた契機はここにある。

そんな中、私の中で沸々と沸き起こった疑問がある。それは、日本は在日中国人の多様な価値観を認め合える社会なのだろうか、ということである——。残念ながらそれはお世辞にも言えない。とりわけヘイトスピーチの問題は深刻だ。

都内を散策していた際に「無差別暴動を起こす在日中国人を排斥せよ」とのシュプレヒコールが聞こえてきた。私たちは忘れていないだろうか。暴動を起こすということは、その背景に暴動を生み出す社会的な事情があるということ。「在日中国人」である彼らは、自身の価値観や個性を周囲から否定され、自暴自棄になりながら、その苦痛によって蓄積されたエネルギーを暴力行為を介して発散することがあるのだ。だからこそ私達は、彼らを罵詈雑言で「突き放す」のではなく、対話で「受容」しなければならない。日本人と在日中国人が文化的な多様性を認め合うことができれば、防げたはずの暴動の減少にも繋がっていくはずだ。仮に人種差

別撤廃基本法が実現し、ヘイトスピーチが違法化したとしても、それは建前上の課題解決であろう。最も重要なことは、いかに多様な価値観を受容する国民性を築き上げるかなのだ。

私が抱き続ける、理想的な社会像がある。それは、在日中国人も日本人も互いの価値観を認めあい、共通善を求める社会である。そのためには、在日中国人に日本の社会に適合させることを強要せず、対話を通じて「違い」を受容しあう姿勢を持ち合うことが重要だ。①困っている中国人の方がいたら懸命に話を聞くこと。②「日本式」を強要せず、中国人としての生き方を尊重すること。私という一人の大学生にはこれくらいしかできないかもしれない。しかし、この在り方を草の根状に多くの人に伝えていくことが大きな問題解決に繋がる。そんな社会が実現したら、改めて彼に謝りにいきたい。

「日中の相互理解の未来のために」

倉澤正樹

日本と中国の友好的隣人関係を願い、相互理解の鍵としての戦争反省、及び日中関係の根源性を示す文化交流の歴史について語りたい。

2015年8月14日、安倍談話が発表された。日本近現代史を世界史の文脈に位置づけ直そうとする試み自体は頷けるが、「植民地支配」「侵略」「痛切な反省」「おわび」という重要な言葉が、一人称でなく三人称で語られたことや、日本人の将来世代の謝罪責任の消失を示唆する一言については、「これは日本側から言って良いことではなかろう」という不安を禁じ得なかった。

抗日戦争で憎むべき日本兵（日本鬼子）に家族を殺された中国大陸の人々。大東亜戦争で徴兵され、否応なく人を殺さざるを得なかった日本兵（そこには朝鮮半島や台湾出身者も含まれる）。重慶・ヒロシマにおける無辜の民の全く不条理な死。これらに対し、現在の我々は日本・中国などの国としての立場が先立ってしまい、一人間としての自然な気持ちから、人の苦しみを悼み、共感する心情を失ってしまっていないか。日本は隣人中国を恐れ、防衛本能のため、過剰に攻撃的になっているようなところがある。中国も国威発揚の意図を持って自国を「戦勝国」とし、日本を軍国主義・ファシズムと断罪するような歴史認識を示し続けられれば、日中友好も真摯な反省も遠ざかる。両国民における、軍国主義・ファシズム・戦争に対する具体的で客観的な認識の上に、人間としての共感を含む相互理解の道が開かれると考える。

一方で、昨今の隣人中国との関係も、悠久の交流史から見れば、一時的なさざ波に過ぎないとも言えよう。これは両国にとって希望たり得る歴史資源である。私は「日本」独自のものとされる国粋思想や古典文学の領域において、中国文化の影響の根深さを示す事例を列挙し、近年の勢い著しき日中異質論に対抗したい。

靖国神社の思想史を読み解くと、王朝の正統性を唱える儒教由来の大義名分論（君臣の別を強調）や華夷思想（中華と夷狄の別を強調）が不可欠の構成要素として溶け込んでいる。1644年に滅亡した正統なる明王朝を復興するため、夷狄たる清王朝に抵抗し、夢破れて1659年に長崎に亡命した朱舜水（1600～1682）は、水戸藩主徳川光圀の師となり、儒教的大義名分論に基づく日本史叙述を試みた『大日本史』の編纂において、大きな影響を与えた。幕末の水戸藩においては、西洋列強に対する脅威という時代環境の中で、儒教的大義名分論は天皇中心の国家神道と結びつき、尊王攘夷思想を謳う後期水戸学に発展した。1841年に開設された水戸藩校の弘道館では、「尊王攘夷」「神儒一致」のスローガンが掲げられ、孔子廟と鹿島神社が共に祭られていた。靖国神社境内の遊就館における皇国史観の語りや、尊王攘夷に殉ずる英霊顕彰の信仰は、現代の歴史学や平和主義の見地からは全く理解に苦しむが、その背後には中国由来の大義名分論・華夷思想の浮遊霊が浮かんでい

るようである（以上、小島毅『靖国史観』2007、ちくま新書を参照）。大東亜共栄圏思想のスローガンの「八紘一宇」は、中国の史書を模倣して漢文で書かれた『日本書紀』の「掩八紘而為宇」に由来し、「八紘」の語は『淮南子』『列子』『晋書』などに見える。『古今和歌集』巻頭にて和歌の精髓を宣する仮名序は、『詩経』の序文を和歌の世界に換骨奪胎したものである。『徒然草』の章段中には、一見して他の章段とは明らかに異質と分かる、断言を多用した硬質な漢文調の章段が幾つか紛れ込んでいる。散文の達人兼好も、和文だけでは表現できない可能性を漢文に感じていたに違いない。

中国文化は日本の時代状況により、豊かな日本文化の素地を形成することもあれば、悩ましいことに中国侵略の具となることもあった。逆に言えば、平和的に文化を発展させるにせよ、戦争するにせよ、「日本」とっては隣人「中国」が不可欠だったとも言える。君、日中は分かり合えないなどと言う勿れ。

「過去の戦争と現在の私」

菅原悠希

以前の私は、多くの日本人がそうであるようにメディアの偏った報道に影響され、中国に対して漠然としたマイナスの印象を抱いていた。中国語を履修して以来中国人と触れる機会が増え、特にこの半年間、大学での日中交流やチューター活動、シドニーでの短期留学を通して、沢山の中国人と知り合った。また、戦後70年の節目の今年、70年談話や中国軍事パレードがマスコミで騒がれており、この「隣人」について考える良い機会となった。このように様々なきっかけが重なり、日中関係や両国の歴史問題について学び始めたことで、私の中国に対する見方は大きく変わった。

映画は、単なる娯楽ではなく教科書で学べない大切なことを教えてくれる。ここで、日中の歴史問題について考えさせられた一つの映画を紹介したい。タイトルは「南京！南京！」。「南京大虐殺」を如実に表現したノンフィクション映画である。モノクロの映像や淡々と続く戦闘シーン、リアルな南京の街並みが、当時の残酷な虐殺をありのままに表現しており、私は大きな衝撃を受けた。真実を世界中の人に伝えたいという陸川監督の熱い思いが伝わった。この映画の最大の特徴は、ある一人の日本兵の目線で話が展開し、彼の苦悩や葛藤、優しささえも描いているということである。この点で、日本人を感情のない残酷な「鬼」とし、中国軍の勇ましさを謳歌するばかりの抗日映画とは明らかに違って、しかしだからこそ、多くの人に良くも悪くも衝撃を与えた。この映画を受け入れようとしめない中国人も少なくない。近年中国人による反日運動が報じられていたように、「彼らの日本人に対する認識は依然として『鬼』に止まり、現在の本当の日本に対しては全く耳を貸さない」と中国の友人に聞いた。しかし、「南京！南京！」に出演した江一燕が「日本の若者に72年前の罪を背負わせるのは不公平だ」と言ったように、日本の犯した残酷な行為に対して正しい認識を持ち、友好関係を築こうとしている中国人が増えているのも事実である。杭州で催された映画の試写会では、日本人俳優に対して称賛の声が多く観客からあがったという。

「南京！南京！」が映画として成功したかといえ、必ずしもそうではないが、過去の苦難をありのままに世界に発信し、人々の心に刻み付けるといって、この映画は大きな意味を持つ。実際、日本の教科書や映画には歴史美化されているものが多いと感じる。我々は、このような虚構の歴史や、メディアの情報を鵜呑みにして他者を批判するような不毛なことをしてはならない。歴史認識と国民感情を分けて考え、互いの良さを認め合うべきだ。その一つの手段としてこの映画は大変優れているため、多くの人にこの映画を見てほしいと強く思う。当初この映画は日本では上映できなかったが、陸川監督の強い希望と、「史実を守る映画祭実行委員

会」の努力により、つい最近小範囲に上映することができた。このような映画は終点ではなく、より正しい認識を待たせる起点として、今後も増えてほしい。

ここで少し話を変えて、私自身の話をしたい。私がこれまでに知り合った中国人たちからは反日思想など全く感じなく、むしろ、日本に興味をもって熱情的に学んでいる彼らの姿に感銘を受けた。一部の日本人が行った過去の行為に対する非難を日本人全体にぶつけるのは間違っているし、我々日本人も‘中国人’と一概に評価してはならない。しかし、訪日の中国人観光客は増えている一方で、訪中の日本人観光客は激減しているのが現状だ。我々日本人は、史実を正しく認識した上で中国人との交流を積極的にもち、日中友好への一歩を踏み出さなければならない。

現在私は、身の回りに見える日中友好を広げたいと志し、中国語圏への交換留学を目標に日々勉強中だ。この作文を書いたことで、自分の考えを整理すると同時に、自分がこれから何をしたいのか改めて確認できたように思う。

「日中交流のカタチ」

日高真太郎

今日、日本には多くの日中交流企画が存在している。日中交流の目的は、「相手国への理解の深化」、「日中交流人口増加」の二点にあると思う。

しかし、日中交流人口を増やすことを実現できている企画は少ないと感じている。中国に対する知識や語学力等を前提とせず、対象となる層が広い企画であっても、元々中国に興味がある人ばかりが参加する傾向にある。事例として、私は以前中国に興味のない人に来てもらえるように企画されたイベントの運営を手伝った経験があるが、その際行った調査では、約 200 名の参加者のうち、「元々中国に興味がなかった」、「どちらかといえばなかった」人は僅か 4%だった。

中国に興味のない人が日中交流に踏み出すには何が必要なのだろうか。私が 2 年前、突如として中国に興味を持つようになったのは、あるプログラムに参加したことがきっかけである。内容は、「日本と中国の選抜された学生が合宿生活を送りながら日本を代表する企業を訪問し、与えられた課題に対し議論する」というものだった。参加動機は魅力的な学生と出会い、議論等を通じて刺激を受けたいと思ったからである。また、有名企業で特別なことをできるという満足感もあった。いずれにせよ、交流目的ではないので中国人の存在は心理的に負担ではなく、逆に中国人に特別期待することもなかった。議論の際、考えの多様性に触れるという面では少々の期待はあったが、それは交流というより議論を戦わせることを期してのことで、最悪の場合、中国人と口論になることも覚悟していた。しかし、合宿という性質上、空き時間の中には“日常”があった。移動中や食事の時の談笑、風呂や寝室での政治的な話や恋愛話。中国人と話す時の感覚は日本人と話す時の感覚と少し違っていた。それぞれ良さはあるが、中国人は感情の表現が素直で、話していて独特の心地良さを感じた。そして中国の個人を媒体として中国を見たとき、そこには見たことのない景色が広がっていたのである。主にテレビを媒体に形成してきた中国像はわずか数日で崩れ、新しい像の形成が始まった。企業での課題に取り組む際も、気が付くと成果物など二の次で、「相手の意見の背景には何があるのか」に注視している自分がいた。そして、それこそがプログラムの真髄だと気づいた。

「日中交流をします。参加者募集中です。」といった企画の告知を見ても当時の私は参加しなかっただろう。私は「優秀な学生と有名企業で議論できる」という点に興味を持ったのである。すなわち、日中交流の裾野を広げるためには、日中交流を前面に押し出すのではなく、広く学生の興味を引くテーマを前面に押し出した企画を充実させることが必要だと思う。例えば、官公庁や政治家の方との議論、中国人観光客を対象としての起業体験等、多くの学生が興味を持ち、かつ見栄えがよいテーマは数多くあるはずだ。

私は現在、例の企業訪問を中軸に据えた事業の代表を務めているが、今まで定員全てを“相手国に良い印象を持たない学生”で満たすことも可能なほど、幅広い層からの応募があった。最終的には参加者の半数を相手国に対して良い印象を持たない学生にしたが、調査結果を見ると、全日程終了時には印象は良い方向に変わっていたようだ。私たちは相手国に興味を持たせるような仕掛けを特別用意したわけではない。“日本人と中国人が同じ時間を共有するきっかけ作り”が肝なのである。

現在私達の事業には年間約 80 名の学生が参加している。同様の趣旨で事業を運営している団体もいくつかあると思うが、全体としてまだ少ない。日中交流の裾野を広げるためには、広く学生の興味を引くテーマを前面に押し出した企画の絶対数を増やすこと、一企画あたりの規模を大きくすることが必要であると思う。多様な背景を持つ人の協力により求心力のある企画が生まれ、日中交流の輪が段々と広がっていくことを切に願っている。

隣人「中国」とわたし

楠田法隆

私は 20 歳で初めて海外に出た。それまで中国はもちろん、海外とも一切の接点を持たなかった。中国へのイメージは漠然と「紅い国」であり、印象も決して良いものではなかった。大学 3 年生になる春休み、ニュージーランド (NZ) への 1 カ月間英語研修の機会があった。これが私の「初海外」であった。ホームステイ先からバスに乗り、オークランド大学の ESL へと通った。NZ のバスは、次の到着駅が表示されない。行きは大勢が大学前で降りるので到着が分かるが、帰りは曲がり角の都度、周りの建物・看板に神経を集中し降車していた。ある日、空も暗くなりかけの時間、失念し駅を降り間違えてしまった。あたりは暗く、ホームステイ先まで無事に戻れるかどうか不安で焦る私が道を尋ねた相手が、初めての中国人の友達となった。彼もオークランド大学の学生であった。

帰国後、彼から連絡があった。彼の実家である「武漢」に招待された。しかも、飛行機代・宿泊代・食事代等全ての費用を負担してくれた。「なんというセレブと知り合ってしまったんだ!」と感激していたのだが、後で聞いた話に衝撃を受けた。実は彼の家はそこまで裕福ではなく、私を招待するのに父親の 1 カ月分の給料をほとんど使ってしまったのだと。こんな「お・も・て・な・し」が果たして日本で考えられるだろうか。武漢では、中国語で意思疎通が全く取れない日本人である私に、彼の義理の兄、その兄の会社の部長（なぜか円卓テーブルの会場で彼が在席した）等、現地で会った全員が暖かくもてなしてくれた。

武漢での体験を通じて、「もっと中国について知りたい。」、「中国語で彼らといつか話せるようになりたい。」という衝動に駆られた。帰国後すぐに中国語の学習をスタートすべく日本国内の語学教室に通い始めた。次第に本場中国で本格的に中国語を学びたい気持ちが高まり、両親へ「中国留学」の希望を打ち明けた。大反対さ

れた。この世代にとって中国の印象はとても良いものではない。しかし、今は亡き祖父が、「これからは中国の時代になる。役に立つことを信じて勉強してきなさい。」と後押しをしてくれたことで、私は北京語言大学への短期留学を実現させることができた。

北京に留学してから、中国への理解は体感レベルで日に日に深まっていった。北京留学は充実そのもので、まさに「青春時代」だった。今現在、私は中国での体験を日本国内の学生達に伝えるため、全国の高校で講演活動に奮闘し、多くの日本人学生の中国留学を斡旋してきた。私の体験談から、次の体験者が生まれる。またその体験者から次の体験者へとバトンを繋いでもらえたらこんなに嬉しいことはない。

私は、日本と隣国中国との関係は「戦略的友好関係の時代」に突入したと感じている。戦後70周年のイベントもあり、両国の政治面における純粋な「友好関係」の実現は今後も難しいと思うからだ。高校での講演会の最後、学生に語る。

中国を好きになれとは言わない。漠然と嫌いであっても大いに結構である。

しかし、それらは「中国を理解しなくても良い。」という理由にはならない！

これだけの中国人訪日観光客を迎える時代、尖閣諸島事件勃発以来、円安や中国現地での物価上昇も重なり撤退する日系企業は少なくない。それでも、やはり我々の今後の生活から中国との関係を完全にゼロにすることは不可能である。

「日本で日本人として生きていく上でも、中国や中国人から避けられない！」

この事実こそが、我々が中国や中国人を少しでも理解しておかなければならない理由に他ならないと思う。今後も、私は自らの活動の中から、一人でも多くの日本人に中国を少しでも知ってもらおうキッカケを与えたい。これからの日中関係の架け橋として重要な役割を担う人材の育成に少しでも貢献できれば感無量である。

「隣人『中国』と私」

中島大地

中国のいまを理解したい

大学に入学した頃、私は三国志や水滸伝にぼんやりと興味を持っているだけでした。現実として存在する中国ではなく、物語の中の中国に惹かれていた、といえます。ほとんど、中国のことを知らず、中国人の友達もいませんでした。

転機となったのは大学一年の夏休みでした。天津にある南開大学に一ヶ月留学して、初めて現実の中国にふみだすこととなりました。それまで日本から出たことがなかった自分にとって、天津の生活は全てが新鮮でした。街並み、料理、言語。様々な点が日本とは異なっていて、衝撃を受けました。

授業の際、偶然、中国語の先生をしていた大学院生から中国の現代文学を薦められました。当時はまだ自分の中国語の能力が低かったため、内容を理解できませんでした。しかし、薦められた作品を購入して、帰国後辞書を使いながら読み進めました。その過程で、作品が現実の社会の在り方を反映していると知り、興味を持ちました。結果として、蘇童や余華といった中国の現代文学が私の卒業論文のテーマになりました。

学業と並行して、日中交流の学生団体にも関わりました。その経験も、私にとっては大きな財産です。具体的には、日中交流を目的とした学生団体のスタッフとして、2014年の夏上海に、2015年の夏北京に行き、討論会、街頭インタビュー、フィールドワークを手伝いました。

その活動の中で、多くの中国人学生と知り合いました。ある大連の大学に通う学生は、日中交流合宿に参加した後、「自分も、大連に日中交流のための学生団体を立ち上げたい」と語りました。そして、今もその準備

を進めているそうです。また、ある上海の大学に通う学生は日中交流合宿に参加した後、「日本人に対するイメージがますます良くなった」と語りました。そして、東京に半年間留学に来ました。

大学生だけではなく、市井の人たちとも出会いました。今年は、抗日戦勝 70 周年式典がおこなわれる直前に、北京に行くことになりました。ひょっとしたら日本人に対する風当たりも強いかも知れないと、行く前は考えていました。実際、観光地の警備などは厳重でした。天安門、故宮に行くこともできませんでした。しかし、北京の北海公園で、職業に関する街頭インタビューを行った時、多くの中国人は友好的でした。そして真剣にインタビューに応じていただくことができました。メディアは、「日中関係の冷え込み」にスポットをあてることが多いですが、個人レベルでの交流は可能性に満ちていると私は感じました。

いま、私は、学部時代の研究を引き継いで、大学院でさらに中国に対して理解を深めることを目指しています。その際、日中の共通性と、日中それぞれの内部にある差異に目を向けることを意識したいと考えています。

日中という言葉が持ち出される時、しばしば両者の相違点が強調されます。しかし、隣国ということもあり、日中の間には、文化面などでは共通点が数多くあります。また、改革開放以後の中国が抱えている問題は深刻さの度合いは違っても、日本の抱えている問題と共通する場合があります。過度の経済至上主義、環境破壊、少子化。問題点にはともに手を携えて対処していくことが可能です。

そして、日中それぞれの内部には膨大な差異があります。中国の小説家・余華は、《生活在巨大的差距里》というエッセイの中で、北京の男の子がボーイングの自家用ジェット機が欲しいと言い、農村の女の子は白いスニーカーを欲しいと言う現状を指摘して、境遇によって夢の大きさまで左右される中国を問題にしています。地域、社会階層や家庭環境によって状況は大きく異なります。同じことが日本にも言えます。日本という言葉で、ひとくくりに見えなくなる部分も数多くあります。その複雑さを踏まえてこそ相互理解が可能になるのではないかと私は考えています。

その二つの観点を大切にしながら、これからさらに中国を理解するため努力していきたいです。

「狭間に生きる僕達は、見えないものを見つめ続ける」

松本祐輝

2012 年、自分が高校 2 年生だったその年は日中関係が急速に悪化し始めた年で、自分の価値観が崩れた年でもあった。

小学生の頃に上海に 1 年間暮らしていた自分は元々中国への愛着があった。だが度重なる事件や悪化する国民感情を前に、自分の今までの「友好」という常識が崩れていく様に見えた。そして隣国を精一杯擁護する自分に、それを裏付ける知識が、何より経験が少ないことに戸惑った。自分には中国が何も見えていないのではないか。向き合い方の分からなくなった隣国をもう一度見つめなおすため中国語学科への進学を決めた。

大学に入ってから何度も中国へと行った。1 年の 9 月に日中友好協会の訪中団の学生代表として 4 都市を回り、3 月に北京への短期留学で街を歩き回り、2 年の 7 月には中国韓国の学生と共に長春と延辺の満洲国の爪跡を巡り歴史を語り合った。

これらの旅の中で出会った人々に自分の人生は変えられていく。学生代表として重圧を持っていた自分にずっと寄り添い支えてくれた通訳の方、東北地方の田舎で元気に日本語を学ぶ高校生たち、アメリカの大学院に

希望を見出す再会した旧友、四川から上京し民族舞踊を続ける羌族の踊り子、真実を知ること、考え続けることを生徒に教える勇気ある高校の先生、消えそうになる延辺の戦争の記憶を記録し続ける延辺の研究者の方—
人々の背景にある民族、宗教、文化、時には性的指向や思想は驚くほど多様性にあふれている。国家という紋切り型の枠では語りきれない彼らひとりひとりの「歴史」に中国という国の奥深さを感じた。

中国への旅の中で本当に素晴らしかったのは日本語学部の仲間たちとの出会いだ。

家族が日本を嫌っているという日本語学部の学生は少なくない。歴史的な痛みに基づいているその感情は日本人に深く刺さる。自分を含め、実際に中国に行く中で中国の人からの日本への厳しい言葉に突き当たったことのある人もいるだろう。だがそのような人々の感情との狭間で彼らは日本語の勉強を続けている。多くは行ったことの無い隣国を見つめて—

大学1年の冬、そんな彼らと自分はプロジェクトを共に作りはじめた。

半年後の8月に中国語を学ぶ日本人と日本語を学ぶ中国人がお互いの国を相互訪問しディスカッションをする。その企画の中で自分が大切にしていたのは学生だけでない現地の人との交流だった。中国の多様さをもっと知るために、そして日本の多様性をもっと知ってもらうために、企業人や中高生、5回の街頭調査といった企画を仕上げた。

そして迎えた本番、街頭調査は面白かった。東京での歴史認識の調査にも多くの人が温かく答えてくれ、別のテーマで取った中国では更に多くの人が積極的に応えてくれた。特に北京の曇底下村で出会ったおばあさんは「日中友好のため」とすももをくれた。

順調だった活動だが、忘れられない場面がひとつあった。

北京で活動をしている時、ディスカッションをしている場所に大勢の警察が入って来たことがあった。設備の調査に来ただけで自分達の活動とは関係なかったのだが、日本語での活動に眉をひそめ、なぜ日本語を話しているのかと詰問調になった。その時、一緒にいた中国の友達たちは口々に抗議して言った。

「日本語を話していて何が悪い」

自分が中国を歩くとき、傍ではいつも仲間たちが支えてくれる。そんな仲間の存在をしみじみと感じながら自分は大学に入ってから4度目の訪中を終えた。

「中国を見た」というのがおこがましいほど自分はまだ何も知らないだろう。それでも自分は中国という国の多様性を知り、お互いへの嫌悪のあふれる両国の狭間で学び続ける仲間たちと出会った。どちらも高2のあの頃は見えなかったものだ。

きっと大切なものは表面からは見えないものなのだろう。だから自分はこれからも中国を訪れ続ける。そして見えないものを見つめ続ける。今度は仲間たちと一緒に。

『三つ編み』から抱いた興味

塚原かたり

三つ編み。これが、私が最初に中国人と対面したときの第一印象だった。私の在籍していた小学校では、夏

休みに中国揚州市の日本語学校の子どもたちと触れ合う国際交流会があり、私は小学4年生のときに参加した。集まった中国人の子どもたちを見て、女の子が全員三つ編みをしていたことに驚いたことを、大学生になった今でもよく覚えている。

その日はまず、日本人と中国人で、お互いに挨拶の言葉を交わし、私たちは運動会で毎年踊っていた『ソーラン節』を披露、対して中国人たちは、日本語で日本の『四季の歌』を歌ってくれた。私はその時、英語でさえあまり話せず、中国人の綺麗な日本語の歌に聞き入り、当時の私は冬が好きだったため、「心広き人」という歌詞が一層心に沁みた。その後、私たちは交流生と一緒にプールで遊んだ。言葉は通じなかったが、みんな水をかけ合ったり泳いだりした。その場では日本人も中国人も関係なかった。みんな同い年くらいの子もだった。すぐに仲良くなれた私たちは、プールでの遊びを満喫し、その後の昼食も一緒に食べ、交流会を終えた。小学生の時に交流した中国人とは、言葉が通じてないため名前も知らず、SNSも発達していなかったため、その日限りの交流となったが、一日だけでもその子どもたちと同じ時を過ごし、友達になれた経験は印象に残っている出来事である。

時を経て、高校生になり、世界史の授業で中国史を学習した。辮髪など、中国人の髪型について学び、三つ編みだった中国人の子どもたちのことを思い出した。その他に、紫禁城や万里の長城などの歴史的建造物に触れ、中国に行って実際に見たいと思った。

その後、私は大学に入学した。そこで、中国人留学生と出会い、友達になった。その友人の髪は長い、三つ編みはしていない。ステレオタイプが崩れた。現代の中国はどんなところなのだろう。現代の中国人はどんな生活を送っているのか。様々な疑問が浮かんできた。中国に対して更なる興味が湧いた私は、その友人から、大学近辺でどこの中華料理屋が中国の味なのかというような、身近で感じられる中国文化や、素材の味の日本と味付けを楽しむ中国という、日本と中国の違いなどを教わった。その友人は、日本での生活を満喫していて、浴衣で花火大会に行けたことがとても楽しかったと話していた。

私は今、大学の第二外国語の授業で中国語を履修しているが、今まで約一年半中国語を学んでいても、未だに簡単な漢字しか読めず、もちろん中国語の歌を歌うこともできない。改めて、小学生の時に交流した子どもたちや留学生の、努力や日本への愛を感じた。

私は、私が触れ合った中国人のことが好きだ。自分との考え方・文化の違い、日本への憧れ。それらを育んできた中国という国はどのようなところなのだろう。三つ編みの女の子だらけの世界かと想像していたが、どうやら違うようだ。中国に実際に行き、自分の目で見て、感じて、新たな中国についての発見ができたと思う。

「南京と『南京』 中国と『中国』」

近藤香月

私は2013年の9月から2年間南京大学で中国語を学んでいた。なぜ南京を選んだか、それは2012年の夏にも南京大学で奈良女子大学の語学研修に参加したからだ。その時の感想は「南京」と南京はかけ離れているというものだ。当時は日中関係が緊迫していたということと、親戚から聞いたイメージとがあり、日本人が「南京」に行くと、石や刃物で襲いかかられると思っていた。さらに、南京は第二次世界大戦の際、日本軍が虐殺行為を行った都市であるという事実も、「南京」イメージを形成する要素となっていた。しかし、語学研修で南京を訪れ、南京大学の先生や寮の職員の方々と触れ合い、私の中から「南京」はすっかり姿を消した。中国

語の分からない私たちに毎日話しかけてくださる寮の警備員の方、いつも大きな明るい声で同僚たちと話している元気な寮の清掃員の方たち、そそっかしいところもあるが頼りがいのある先生…みんな“南京人”だ。みんな私たちが日本人だと分かった後も、変わらずに優しく接してくれた。そんな中国の人たちを、南京の人たちを、もっと知りたいと思い、私は南京という土地に再び来た。

南京で2年間留学し、得たものは大きい。まず挙げたいのは、やはり南京の地元の人とのつながりである。私が主観的に抱く中国人の印象として、日本人よりも“缘分”やつながりを大事にすると思う。そのせいなのか、中国人の友人や先生、寮の職員の方は私が本帰国した今でも、連絡をくれている。南京で知り合った日本人の友人や欧米系の友人にしても、帰国をしてしまうと相手の都合を慮ってしまうからか、連絡しづらくなり疎遠になってしまうことも少なくない。しかし、中国の人は、いい意味で、遠慮をしないために、何の前触れもなく、半ば突然メールを送ってきてくれることがある。帰国した今もなお、連絡が続いているのも「親しき仲にも礼儀あり」方式でなく、変に気を遣わないラフな付き合い方に起因していると思う。次に、中国という、日本が昔大きな影響を受けた国に行ったことで、客観的に両国を比較、考察することができるようになった、人付き合いにおける接し方の違いもその一つである。他にも、節句について、日本の端午の節句といえば男の子のものである。しかし、中国の“端午节”と言えば“屈原”を記念するもので、日本ではちまき、中国では“粽子”を食べる。節句の起源と食べるものは似通っているが、今では節句の持つ意味合いが違っている。最後に得た一番大きなもの、それは自信である。中国語という観点で見れば、私よりも発音が良かったり四字熟語を知っていたり私の上に行く人はたくさんいる。頭の良し悪しや学歴なども私よりも優秀な人の方が多い。以前までの私はこのように常に上を見て自信を持てていなかった。しかし、英語の話せない私が中国語だけで、2年間外国で暮らすことができたという事実は私の自信となった。外国人とコミュニケーションを取るなど、英語が流暢に話せる人のみにできる特権であり、私とは別世界だとずっと思いこんでいた。英語のみが国際化の絶対条件だと思っていた私にとって、中国語でも外国人と交流できるということがとても新鮮だった。今ではカンボジア人やポーランド人、ドイツ人など世界各国の友人がいる。私が別次元だと思っていた境地に自分が今達しているというこの現状も、私が自信を持てるようになったきっかけの一つである。

将来、私は、中国に拠点を置き、留学生支援団体を発足させたい。留学期間中、新入生が語学面やビザなどの手続き面で苦労している姿を何度か目にした。駐在の会社員は会社が全てを請け負ってくれるが、日本人の数自体も少ない南京では、留学生は手続きなどを独力でしなければならない。そんな場所だからこそ支援団体が必要だと思うし、日本人として南京の歴史を学ばなければいけないと思う。今後は“中国梦”実現にむけて、がむしゃらに努力したい。

「隣人『中国と私』」

山口真弓

ありがとう

『自分は大学時代に学んだ中国語を生かして中国社会に貢献していくんだ。それが自分の使命だ。』
そう強く心に決め、就職活動をし、大学4年生の春、内定をいただいた2社のうちより中国語を多く使えるチャンスがあるあるメーカーに就職することを決めた。

私は大学1年生の時、中国語と出会い、中国語が持つ音の響きの綺麗さや、中国人の明るく、温かい性格に

魅了されすぐに中国が大好きになった。周りからはなぜ中国なのか、そんなに中国がいいのかと不思議がられたりもしたが、周りの声なんて気にもならず私の生活の中心は中国一色となった。中国語を勉強したり、中国人の友達と話したり中国へいったり、そんな毎日が楽しく、大学4年間はあっという間に過ぎ去っていった。

そして、大学を無事卒業し、中国語を使って仕事ができるという希望を胸に抱きながら社会人として社会に一步踏み出していった。入社後すぐに運よく台湾や中国に行かせてもらう機会に恵まれた。しかしそこは大学時代とは違いビジネス社会。同じ中国語でもビジネス用語や地域独特の発音がわからないうえに、トラブルも多く、お客様に何度も何度も中国語で怒られる日々が続き、だんだんと心身ともに疲れきり、あんなに大好きな中国語も聞くだけで気持ちが嫌になり、喋ることさえ億劫になっていった。

そんな生活を送っていたある日、突然会社の命令により、上司と上海出張を命じられた。接待を終えてホテルへ帰る時、上司は用事があるといい、違う方向へ走って行ってしまい、私は夜、ひとけがない場所で一人残され、自分の足だけでホテルへ向かうこととなった。しかしながら、気がつくまで徒歩15分で行くはずのところがたつてもたどりつかず、20分、30分と歩き、ようやく自分が迷ってしまったことに気づいた。戻りたくても戻る道がわからない。急に周りの暗さ、寒さに怖気づき、不安と恐怖で胸がいっぱいになった。いったいどれくらい歩いただろう。人が全くいない。疲れた。お店がない。タクシーもない。どうしよう、寒い、でもなんとしてもホテルにかえらなければならない、どうしよう。私は考えるうちに涙がとまらなくなっていた。しばらく泣きながら歩いていくと、小さなコンビニがやっと見え、コンビニのおばさんに泣きながらやっと道を聞くことができた。しかしながらそのおばさんにホテルまでは徒歩で1時間かかるといわれ私はもう力が抜けその場でへたりこんでしまった。しかしちょうどその時買い物へきていた若い女性がどうしたのと声をかけてくれ事情を話すと、ホテルまで車で送ってくれるということとなった。

一瞬海外で知らない人の車に乗ってはいけないという考えも浮かんだが、一人になってしまう恐怖と不安のほうが大きく、すぐに車に乗り込んだ。今となって考えると連絡先を聞けばよかったのだが、その時は名前も住所も聞く余裕などなく、ホテルに着き、やっとの思いで出した小さな声で「謝謝」といいホテルに着いた。

それからというものまた中国人や中国語が大好きになり、またその日から新たな気持ちで中国語の勉強を開始することができるようになった。その後私は転職をし、残念ながら仕事で中国語を使用する頻度は少なくなったが今でも中国語を勉強し、いつかあの人にまた会ってお礼をいいたい、日中友好に貢献したいという気持ちは消えていない。あの経験で私は一生中国と付き合い続けようかと決めた。そして私もいつかあの時であった中国人のように、日本で何か中国人の役にたてることがあれば最高に幸せである。

「人と人を繋ぐ 一隣にすることで」

武富波路

私は現在、小学校で外国籍を持つ児童のサポートを主とした支援業務に携わっている。

彼らは小さな身体に未来への大きな可能性を秘めながら、その身体の数十倍、数百倍も不安を抱え、日本という異文化の中で生活している。私にも同じ経験があるため、そんな彼らの不安を和らげ、少しでもサポートができればと私は通訳として、彼らの隣にいる。

私は大学の時に中国語に出逢った。中国語を学ぶ面白さは、次第に私を虜にした。大学院1年目に指導教官より突然、中国へ行くことを言い渡された。私にとっては苦痛へのパスポートに思えた。外国に1人で行くこ

とにとっても抵抗があったのだ。中国語を学び、多少理解はしていたが、中国で通じる語学を見に付けていたとは言えなかった。現地で学べるというチャンスを遥かに凌駕した不安が襲ってきた。期間は3週間。私にはとてつもない長さに思えた。「絶対、すぐに帰ってやる。3週間なんていられるもんか。」そう思っていた私は、渡航準備もさほどせず上海へ向かった。

上海に着き、空港から大学まで行く為に移動をしなければならなかった。当然、移動方法など調べてはいなかった。しかし、「帰国するために大学で手続きをとらなければ。」と思い、私は仕方なくバス停へ向かった。バス停で地図を広げ運転手に尋ねると、どのバスの運転手も大学の近くまで行くと言っていた。私には訳が分からなかった。とりあえず「どれでもいいや。大学まで行くと言っているのだから。何とかなるだろう。」そう思い、私はバスに乗った。バスに乗る時、運転手が「〇〇で降りるんだよ。そこから、タクシーで行けるから。」と言ったようだったが、私には聞き取れなかった。聞き返すこともできなかったため「はい。」とだけ返事をし、とにかくバスに乗った。

バスは途中のバス停で停車し、そこからある2人組の年配の女性が乗車してきた。2人は私の横に座り、どこへ行くのか尋ねた。私は日本から来た学生で、大学へ行くことを伝えると「〇〇で降りるといいわよ。」と教えてくれた。さっきのバスの運転手と同様、私はどこで降りるのか分からないまま、とりあえず笑顔でわかったフリをした。私はバスに揺られながら、次第に緊張と疲労からバスの中で寝てしまった。

しばらくして、「起きて！起きて！」と体を揺すられた。慌てて起きると、年配の女性2人組が「ここで降りなさい。ここからタクシーよ！大学に行くんでしょ？」と言った。運転手も私が起きるのを待っていてくれたようだった。彼女たちは私がバスを降りてしまうまでずっと「ここからタクシーよ！いい？頑張って！」と言い続けてくれた。

たった数十分前にたまたまバスに乗っただけ。たまたま隣になっただけ。一言二言交わしただけ。それなのに私のことを気にかけてくれたのだ。これが十数年たった今でも記憶に残っている。外国人である私に、中国も日本も関係なく人としての繋がりを感じさせた瞬間だった。人としての繋がりに国境は関係ない。相手を思えば、どんな人であっても、その人のために行動することができるということを私はこの出来事から教えられた気がする。

この出逢いがきっかけとなり、私は当初の予想とは裏腹に、上海に6週間滞在することになった。お陰で、何事にも代えられない経験を私は中国で体験することができた。あの出来事がなかったら、もしかすると私はすぐに帰国していたかもしれないと、今でも思う。そして、上海で2人組の女性と出逢っていなければ、今の職業にも出逢うことはなかっただろう。

私の隣にはいつも中国の子どもたちがいる。これからは、目の前にいる中国の子どもと私との関係に留まらず、日本の子どもと中国の子どもがクラスの仲間として支え合えるように、支援員としての役目を果たしていきたいと思う。

そして、この子どもたちが大人になった時、国の垣根を越え、人と人として協力し合える関係を築いてほしいと切に願う。

「中国で出会った人」

庄崎友紀

中国に対するイメージは一体どんなものがあるだろうか。人口が多い、国土面積が広い、中華料理、世界遺産

がたくさんある、日本への観光客が多い、PM2.5 などがあるだろう。

私自身はというと、以前は中国に対して良い印象をもっていなかった。

そんな私の中国に対する印象、とくに人についての印象が変わるきっかけは今年の3月に中国へ1カ月いったことだ。結果から言うと私はこの旅で出会った中国人がみないひとばかりとても好きになった。

私が出会った人の中で印象にのこっているのは、天津のデパートのトイレで出会った清掃員のおばさんとお客さんだ。偶然私と友達が日本語で話しているのに気がついて話しかけてくれた。

私はいきなり話しかけられて驚きと何か言われるのではないかという怖さでびくびくしていた。するとその清掃員のおばさんは「どこから来たの？中国語を勉強しているの？中国のどんなところが好き？」などとどんどん質問してきた。

そして私のつたない中国語を一生懸命聞いてくれて、「とても上手に話すわね。あなたたちみたいに中国を知ろうとしてくれる学生がいてとてもうれしいわ。私は日本の富士山や寿司が好きよ。日本には2回行ったことがあるけれど、ほんとうに素敵なおところだった。」と笑顔で本当に楽しそうに話してくれた。中国人の中には日本に対して良くないイメージを持った人が多いと思っていたので、このおばさんに会ってこんなふうに日本を好きだと言ってくれる人に会えてとてもうれしい気持ちになった。

また別の日には、交流会で出会った学生が自宅へ招待してくれた。私は友達と二人で学生の家に行ったのだが、その日は友達の誕生日前日だった。学生の家に着くと、おばあさん、お母さんが一緒に出迎えてくれて、お母さんお手製のとてもおいしい餃子をふるまってくれた。学生は、「中国では、誕生日の前日に餃子を食べる習慣があって一緒に誕生日をお祝いしたかったんだ！中国の文化に触れてもっとこの国を好きになってほしい。」と言ってくれた。学生の家族も「また中国に来た時には必ず遊びに来て！」と言ってくれて、帰りにはたくさんのお土産と素敵な手紙をくれた。

まだまだ沢山の素敵な出会いがあったが、特にこの二つの出来事が強く残っている。

私は実際に中国へ行ってみて、中国人は日本人よりも外国から来た人を「おもてなし」しようとする気持ちが強いと感じた。またこの旅で感じたことは「百聞は一見に如かず。」だ。人に限らず、環境や建造物など、この1カ月見たものすべて、中国に行く前にネットやたくさんの人から聞いていたよりもすばらしいものだった。

この旅行を経て、中国についてもっと知りたくなった。と同時に中国の人々に日本を紹介できるように、日本についても学ぼうと思った。私はこの先また中国を訪れたい。そのときは日本について中国語で紹介したい。今は日本で、中国語をはじめ文化や歴史について学んで知識を増やしている。そして実際に中国に行ってもまだ知らないことだらけの「中国」にじかに触れて、教科書や参考書では学ぶことのできない知識を超える見識を増やし、また、日本という国を多くの中国人に伝えていきたい。